

II 藤原京の調査

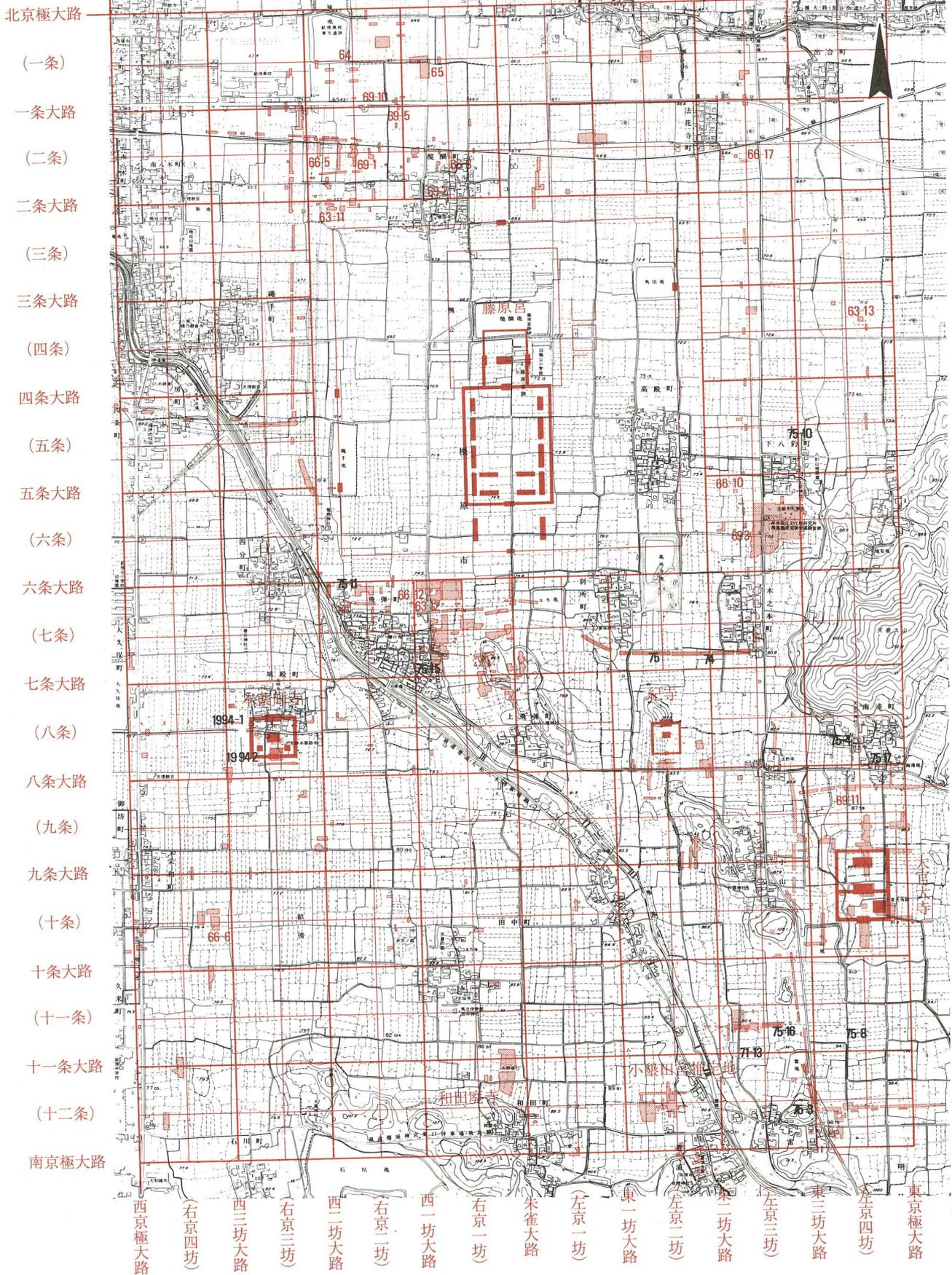


Fig.31 藤原京の調査位置図 (1 : 15000)

0 500m

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 71-13	6 AMH-J	434㎡	94. 1.10~ 94. 4. 7	高市郡明日香村雷字稲葉縄手 (左京十一條三坊)	奈良県	道路建設 (雷丘北方)	西口 壽生	52~57
74	5 AWG-H・P	2368㎡	93.12. 1~ 94. 3.24	橿原市木之本町54-2 他 (左京七條二・三坊)	橿原市	市道飛騨~ 木之本線建設	島田 敏男	39~44
75	5 AWH-A 5 AWG-P 5 AJH-F	2200㎡	94. 4. 4~ 94. 8. 8	橿原市木之本町326他 (左京七條一・二坊)	橿原市	市道飛騨~ 木之本線建設	上原 真人	45~50
75-3	5 AMH-D・E・F 5 AMJ-A	500㎡	94. 6.14~ 94. 7.13	明日香村雷東浦 (左京十二條三坊)	奈良県	道路拡幅 (雷丘東方)	大脇 潔	58~60
75-4	5 BNG-E	16㎡	94. 6.16~ 94. 6.22	橿原市南浦888 (左京八條四坊)	西井輝男	住宅建設	深澤 芳樹	51
75-8	5 AMC-Q・R 5 AMH-B・C	68.7㎡	94. 8. 1~ 94. 8.10	明日香村奥山 (左京十一條四・五坊)	明日香村	下水道竪坑	伊藤敬太郎	62
75-10	5 AJC-B	50㎡	94.10. 3~ 94.10.11	橿原市下八釣町141 (左京五條三坊)	山尾吉史	住宅建替	島田 敏男	61
75-11	5 AJM-C・D	528㎡	94.10. 3~ 94.11. 1	橿原市四分町 256-3・12・13 (右京七條二坊)	奈良県	バイパス建設	金子 裕之	63~65
75-15	5 AWH	300㎡	94.12.12~ 95. 2. 1	橿原市飛騨町94-1 (右京七條一坊)	橿原市	住宅建設	荒木 浩司	未収録
75-16	5 AMH-J	710㎡	95. 1. 9~ 95. 4. 8	明日香村雷上地内 (左京十一條三坊)	奈良県	県道新設 (雷丘北方)	川越 俊一	未収録
75-17	5 BNG	10㎡	95. 2.13~ 95. 2.15	橿原市南浦49 (左京八條四坊)	田中博史	住宅建替	藤田 盟児	未収録
本薬師寺 1993-3次	6 BMY-D	307㎡	94. 2.10~ 94. 4.15	橿原市城殿町 282・283・284 (右京八條三坊)	西田佐芋	計画調査	花谷 浩	66~73
本薬師寺 1994-1次	5 BMY-L・K	170㎡	94. 9.21~ 94.10. 6	橿原市城殿町 231-1・232-1 (右京八條三坊)	太田憲佑	住宅新築	島田 敏男	74
本薬師寺 1994-2次	5 BMY-N	558㎡	95. 2. 3~	橿原市城殿町 282・283・284 (右京八條三坊)	西田佐芋	計画調査	花谷 浩	未収録

Tab.9 藤原京の調査一覧

1 左京七条二・三坊の調査 (第74次)

(1993年12月～1994年3月)

本調査は市道飛驒木之本線の敷設工事に伴う事前調査である。工事予定地は木之本町の集落から西へ向かって、飛驒町へ繋がる。今回の調査では工事予定地のうち木之本町から西へ東西210m分を調査した。調査区は現農道、水路の関係で3区に分け、東から東区、中区、西区とした。調査面積は約2160㎡である。調査地は左京七条三坊西南坪および七条二坊東南坪にまたがり、東二坊大路の検出が期待された。その結果、検出した遺構は、東二坊大路とその両側溝、掘立柱建物9棟、掘立柱塀4条、井戸1基、柵状遺構1基、溝11条である。

遺 構

東二坊大路 東二坊大路 S F 250の東西両側溝を検出した。東西両側溝の心々距離は約12mで、東側溝 S D 249は幅1.85m、深さ45cm、西側溝 S D 251は幅2.25m 深さ35cmである。両側溝とも溝内には黄灰色の砂が充満し、溝内では常に水が流れていたと考えられる。この両側溝間の中央でも、両側溝に並行する南北溝 S D 252を検出した。この溝は幅1.50m 深さ0.3mで、埋土が礫を混じえた暗褐灰色の粘土で、両側溝とは状況が異なる。しかし、溝の位置が両側溝間の丁度中央に位置することから、条坊に関わる遺構である可能性がある。

東側溝からは飛鳥V期の土器が、西側溝からは飛鳥IV～V期の土器が出土した。

左京七条三坊西南坪の遺構 この坪で注目されるのは、二重の区画施設を有することである。すなわち東二坊大路東側溝から約12m東に、1mを越える大規模な掘形を持った南北塀 S A 245があり、さらに S A 245から24m東にも大規模な掘形を持った南北塀 S A 230がある。S A 245・S A 230ともに柱間寸法は2.4m (8尺) 等間である。S A 230では柱掘形の他にほぼ柱掘形に匹敵する抜取穴と小穴(柱痕跡か?)を検出し、小穴は堀形の北辺に位置しており、柱は堀形の北辺に立っていたものと思われる。

東西棟 S B 220は、S A 230の東側に位置する東西に並ぶ9個の大規模な柱穴である。桁行8間、柱間寸法2.4m (8尺) 等間の東西棟の南側柱列と考えられる。柱穴の抜き取り穴からは

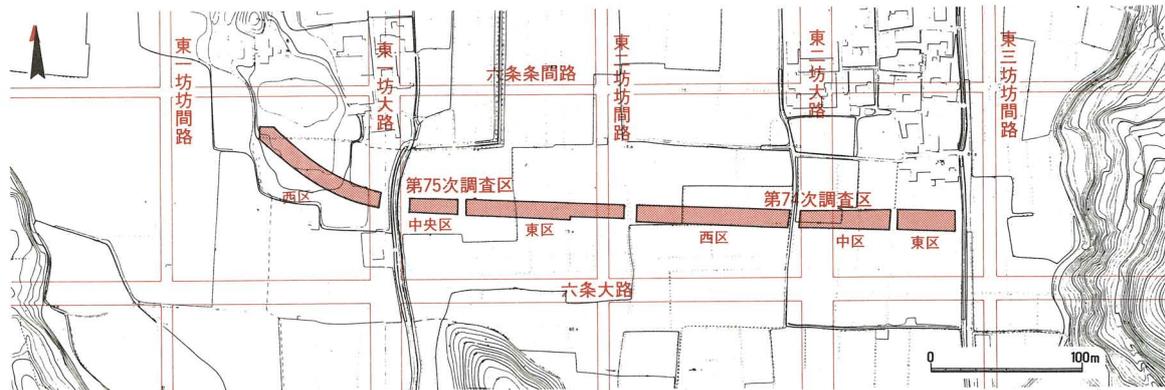


Fig.32 第74・75次調査位置図 (1 : 5000)

飛鳥ⅣもしくはⅤの土器が出土した。

S B 211は東区の東端で検出した南北棟である。桁行5間、梁行2間、柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m（6尺）等間である。

S B 219は東区の南端で検出した建物で、南北棟の北妻と推定される。柱間寸法は1.5m（5尺）等間である。

S B 225は東区西端で検出した南北棟である。方位が北でやや東に振れる。桁行4間、梁行3間、桁行柱間寸法1.8m（6尺）等間、梁行柱間寸法は1.1m等間で全長3.3m（11尺）となる。

S B 240は中区東寄りで検出した南北棟である。桁行3間、梁行1間の身舎の東西に庇をもつ。桁行柱間寸法は1.8m（6尺）等間、身舎梁行2.4m（8尺）、庇の出1.8m（6尺）である。一部柱筋が揃わないが、現状では以上のような復原が妥当であろう。

S B 241はS A 245の東に近接して建つ南北棟で、方位が北でやや西に振れる。桁行3間、梁行2間、柱間寸法は桁行中央間1.8m（6尺）、端間1.5m（5尺）、梁行1.8m（6尺）等間である。

東区の東ではT字形に流れる溝S D 213・214・216と、その交点で柵状遺構S X 215を検出した。T字形の溝のうち、S D 213とS D 214は、当初幅1m、深さ約60cmのL字形の溝で発掘区東端で広がりを見せている。この溝はある時期に中程まで埋められ、この時に溝の交点に柵状遺構S X 215がつくられ、南へ抜ける細い溝S D 216が掘られる。

柵状遺構S X 215は内法1.4mの方形、深さ0.2mで、底に5枚の板を敷き並べ、底板に溝をきって側板を立てている。この遺構は、溝から水を引き込んで水を溜める施設であったと想像される。S X 215の北側とS D 216の取付き部分では、S D 216が浅い土坑状に広がって比較的多くの遺物を含んでおり、水が溢れた痕跡であろう。なお、溝および柵状遺構内からは飛鳥Ⅴを主体とした土器が出土した。

S X 235はS A 230の西に接して位置する根石状の遺構である。拳大の石を根石状に据えた掘形5個がL字形に並ぶ。建物の一部である可能性があるが、現状では確定できない。なお、この一体の地山は礫を大量に含んでおり、地山に礫を多く含む所ではこのような仕事をしなかったとも解釈できる。

左京七条二坊東南坪 S B 270は、西区東寄りに建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行4間以上、梁行2間で北から2間目に間仕切の柱が立つ。柱間寸法は桁行が北から2.1m、2.4m、2.1m、2.1m、梁行が1.65m等間である。

S B 280は、西区ほぼ中央に建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行3間以上、梁行2間、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.65m等間である。

S B 285はS B 280の南に位置し、西妻をS B 280の東側柱と揃える。方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる東西棟で、平面はやや歪である。桁行3間、梁行2間、桁行柱間寸

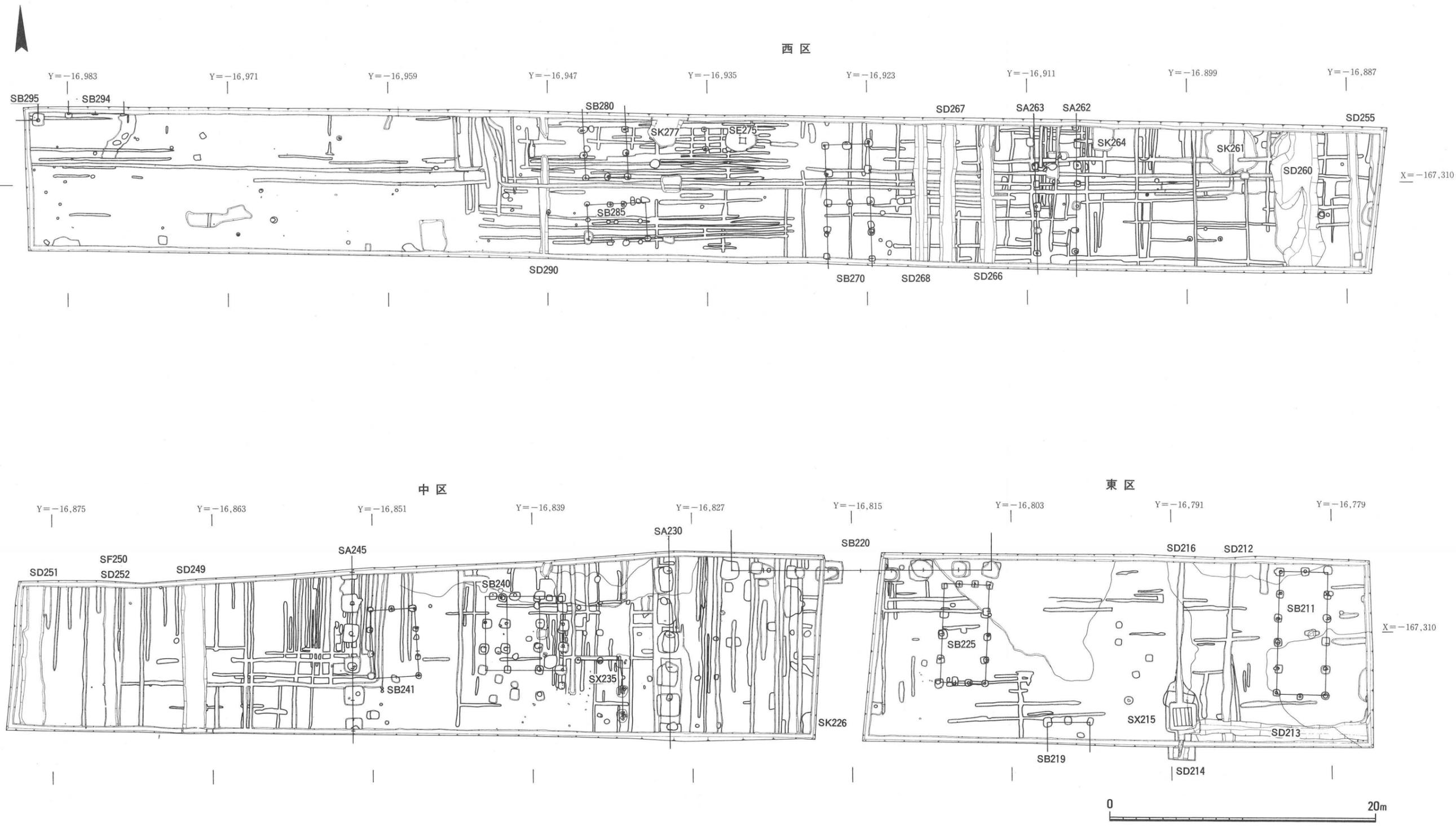


Fig.33 第74次調査遺構図 (1:300)

法は西から1.35m、1 m、1.3m、梁行柱間寸法は1.4m等間である。

S A 262は西区東寄りに建つ南北塀で、方位が国土方眼方位に対して北で若干東に振れる。7間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

S A 263はS A 262のすぐ西に建つ南北塀で、方位が国土方眼方位に対して北で若干西に振れる。7間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

S D 260は幅2～3 m、深さ0.7mの大規模な南北溝で、部分的に蛇行している。溝内からは飛鳥V期の土器が出土した。

藤原宮期のものと推定される南北溝はS D 260の他にもS D 266・267・268・290の4条を検出した。いずれの溝とも幅1 m内外で、深さは30cm～40cm程度である。S D 267からは飛鳥Vの土器が出土した。

S E 275は西区ほぼ中央に位置する井戸である。東西2.3m、南北2 mの楕円形の堀形を掘り、中に横板蒸籠組の井戸枠を据えている。井戸枠は内法幅約45cmで、長さ55～60cm、幅25～30cm、厚さ約2 cmの板の内法位置に上下から板幅分の幅の切れ込みを入れ、最下段を南北方向に立て、順次東西・南北方向に段違に板を組上げている。井戸枠内からは飛鳥Vの土器が出土している。

遺物

土器は飛鳥IV期～V期の土師器・須恵器が出土し、瓦は東二坊大路西側溝から断片が少量出土したのみで、全体的に遺物の出土量が少ない。

まとめ

条坊 今回の調査では、予想通り東二坊大路を検出した。その両側溝の心々距離は12mである。S D 249を東側溝、S D 255を西側溝とすれば両側溝間の距離は約22m、S D 260を西側溝とすれば両側溝間の距離は約26mとなる。また、中区と西区間の未発掘区に西側溝がある可能性も否定できない。しかし、溝の形状および溝内の埋土の状況から判断して、S D 249とS D 251は一連の遺構と考え、S D 249を東側溝、S D 251を西側溝と推定する。このときの道路および側溝心のおよその国土方眼座標は以下の通りである。

東二坊大路東側溝	X = -167,310.0	Y = -16,864.5
東二坊大路道路心	X = -167,310.0	Y = -16,870.5
東二坊大路西側溝	X = -167,310.0	Y = -16,876.5

ここで、注目されるのは大路中央にある南北溝S D 252である。S D 252は前述のように条坊の丁度中央に位置し、埋土からして溝として機能した痕跡がない。条坊計画のために一時的に掘られた溝、または道路面の水抜き機能を果たした溝等の可能性が考えられるが、今後発掘成果を収集した上で結論を出したい。

次に東一坊々間路との関係を見ると、第75次調査では東一坊々間路西側溝S D 302と東側溝

に並行すると推定されている南北塀 S A 301を検出している。東側溝を検出していないために道路心を確定し得ないが、1大尺を35.6cm~35.7cm程度とすると、東二坊大路心から西へ375大尺の位置が S D 302と S A 301の間におさまる。したがって、S D 302を東一坊々間路西側溝として妥当である。

左京七条三坊西南坪 左京七条三坊西南坪は大規模な塀によって二重に区画されている。外側の区画施設 S A 245は東二坊大路東側溝心から約12m（40尺）東に位置し、内側の区画施設 S A 230は S A 245からさらに約24m（80尺）東に位置する。S A 245と S B 220との間隔は約4.8m（16尺）である。S A 230の柱位置が柱掘形の北端に寄っていることから、S A 245と S B 220は柱筋を揃えていたと推定される。さらに S A 245と S A 230も柱筋を揃えており、二重の区画施設とその内部の大規模な建物 S B 220は、ほぼ8尺（2.4m）の方眼上に計画された可能性がある。

以上の S B 220・S A 230・S A 245および S X 215が伴出土器より藤原宮期の一連の遺構と推定される。その他の小規模な建物のうち方位が振れている S B 211・225は上記の遺構とは時期を異にすると考えられる。また、S B 240・241が藤原宮期に属するかどうかは決め難い。

いずれにせよ、この坪内は二重に大規模な塀で区画されて、その内部に大規模な建物が計画的に配置されていた可能性が高い。また、柵状の特殊な施設をもっており、当坪内の施設が相当地に格の高いものであったことを窺わせている。今後この近辺の調査成果が期待される。

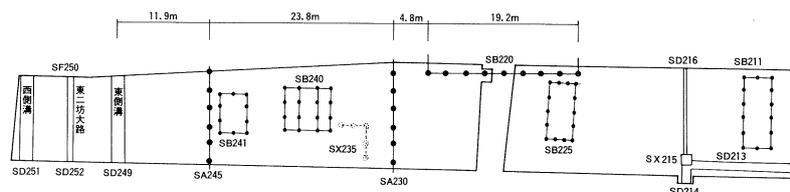


Fig.34 左京七条三坊西南坪遺構模式図

左京七条二坊東南坪 左京七条二坊東南坪は同三坊西南坪に比べ遺構が希薄である。2条の南北塀 S A 262・S A 263があるが、条坊から大きく内側に位置する点、方位が振れる点から、藤原宮期の条坊と関係した区画施設とは考え難い。また、建物が数棟建つが、いずれも小規模な建物のみで、坪内の様相としては大規模な造営が行われた痕跡はない。なお、この坪で注目すべきは6条の南北溝で、その位置関係を下図（Fig.35）に示した。伴出遺物はいずれも宮期直前から宮期に属しており、坪内になぜこのような溝が掘られたかを今後検討する必要がある。

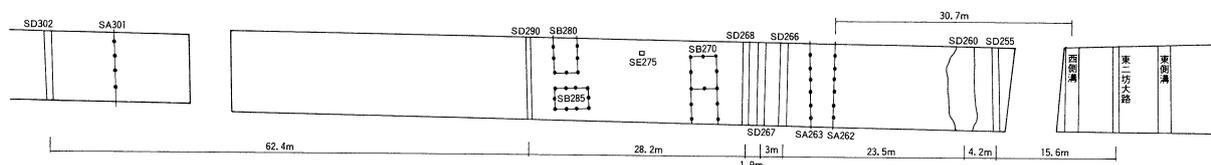


Fig.35 左京七条二坊東南坪遺構模式図

2 左京七条一・二坊の調査（第75次）

（1994年4月～8月）

本調査は市道飛騨木之本線建設に先立つ事前調査で、第74次調査区の西延長にあたる。調査地は橿原市木之本町326ほか、および明日香村小山223ほかに所在し、藤原京左京七条二坊東南坪の西端と西南坪および左京七条一坊東南坪に該当する。調査面積は約2200㎡である。農道や現水路との関係で、東区・中央区・西区の3地区に分けて調査を実施した。

遺 構

検出した遺構には、古墳時代～藤原宮期の流路、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物2棟、掘立柱堀1条、井戸1基とそれにとりつく溝2条、藤原宮期の東二坊々間路、掘立柱建物3棟、井戸3基、中世の居館跡などがある。なお、西区（左京七条一坊東南坪）は飛鳥川右岸に点在する雷丘・小山・宝泉寺山などに連なる残丘の一つである。調査の結果、古墳～飛鳥時代には現状よりも高く急傾斜をなし、裾に広がる平坦地には掘立柱建物などが建っていたが、藤原宮期に大規模な切土・盛土を行い、残丘を広げてやや高い平坦地を造成したことが判明した。その整地土は6世紀中頃の須恵器片を含む黄褐色土層や埴輪片を含む有機土層が斜面に沿って縞状に堆積し、かつての残丘上には古墳があった可能性が高い。

旧流路 東区西端（左京七条二坊西南坪）で南東から北西に向かって流れる旧河川を検出した。本調査区では2条に分かれており、西流路S D 313は幅8m以上、深さ1m以上である。暗黒粘土、有機質を含む暗灰粗砂、灰色粗砂が次第に堆積した状況が看取できるが、遺物をほとんど含まない。東流路S D 310は古墳時代末期から藤原宮期に至るまで存続し、古墳時代末期～飛鳥時代のS D 310Aは幅3～5m、深さ0.6mで、両岸を杭で護岸している。堆積した暗灰砂中から、飛鳥Iを含むそれ以前の土器類（須恵器杯H身・甕片、土師器杯C I・鉢B・高杯H・甕Bなど）のほか机天板（護岸の堰板に転用）、木鉢、横斧の膝柄などが出土した。藤原宮期には下層流路を覆うように暗灰粘土が幅8mにわたって広がる（S D 310B）。上面には多数の杭を打ち込んでいるが、規則性を看取できない。暗灰粘土中からは藤原宮期の土器片・瓦・馬の顎骨などが出土した。S D 310Bの中央から東北に向けて、杭と堰板で護岸した溝S D 312がとりつく。S D 312は幅0.5mで砂が堆積しているが、堰板で護岸した部分だけは底がえぐれて暗灰色粘土が堆積していた。埋土から瓦片などが少量出土した。

古墳～飛鳥時代の遺構 中央区で桁行2間（3.4m）、梁行2間（3.0m）の掘立柱建物S B 320、井戸S E 315とその東西にとりつく溝S D 314・317とを検出した。S B 320の主軸は、北で約45°西に振れている。S E 315は径2.3m、深さ85cmで、井戸枠の痕跡はない。西にとりつくS D 317の水口の両側には花崗岩玉石を立てる。S D 317は西へ延び、約20mで北へ曲折して南北溝S D 319に連なる。S D 319は底に玉石を敷き、両側にも石を立てた石組溝で、幅20cmである。

なお、S D 317の西端付近にも玉石が散乱しており、石組溝を改作した可能性もある。S E 315・S D 317から飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器（須恵器杯H・甕片、土師器杯CⅠ・鉢B・高杯H・甕Bなど）が出土している。

西区下層では、桁行4間（全長6.6m、柱間寸法1.65m等間）、梁行2間（全長4.2m、妻柱を欠く）の掘立柱建物S B 360と掘立柱塀S A 361とを検出した。S A 361は5間で9m、柱間寸法は不揃いである。S B 360・S A 361とも主軸は北で約45°西に振れている。周囲には方位を等しくする溝がいくつかあるが、建物とは直接結びつかない。S B 360の柱掘形を覆う焼土塊から6世紀中頃（TK85）の須恵器高杯片が出土している。

藤原宮期の遺構 東区で東二坊々間路S F 300の西側溝S D 302を検出した。S D 302は深さ70～80cm、幅0.9～1.0mで南でやや狭まる傾向がある。長さ9.3m分を検出し、さらに南北に延びる。溝底には黄灰砂が堆積し、短期間は水が流れたようだ。その上の暗灰粘土層は流れがよどんだことを思わせる。溝内からは少量の瓦・埴・土器片・木片が出土した。東側溝は存在しなかったが、推定位置近くに掘立柱塀S A 301が存在する。S A 301は柱間寸法2.0～2.1mで5間分を検出した。S D 302とS A 301とは心々で東西約8.5mを測る。

S A 301の東、藤原京左京七条二坊東南坪内には、井戸S E 304がある。S E 304は直径1.5m、深さ1.15mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から少量の土器片が出土した。

S D 302の西、左京七条二坊西南坪内においては、上述したS D 310B・S D 312以外に、東区で井戸S E 305・309、中央区で掘立柱建物S B 325を検出した。S E 305は直径2.5m、深さ1.7mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から完形平瓦を含む瓦片、飛鳥Vの土器（土師器鍋・甕Bなど）、角材・木製匙（杓子）・瓢箪などが出土した。S E 309は直径2.0m、深さ1.7mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から飛鳥Vの土器（土師器鍋A・甕B・盤Aなど）、瓦片、籠・斎串などが出土した。S B 325は梁行2間（3.9m）の南北棟の北妻部分で、桁行1間（柱間寸法2.4m）分を検出した。妻柱および2本目の側柱は、玉石を礎盤にしていた。

東一坊大路は中央区と西区の間を通るが、農道・水路の関係で調査できなかった。その東の左京七条一坊東南坪内（西区）には、掘立柱建物2棟（S B 350・351）がある。これらはかつて急傾斜だった残丘を切り崩し造成した東南向きの緩斜面上に建っていた。一辺1m以上の大型柱掘形をもつ掘立柱建物S B 350は、梁行3間（6.0m、柱間寸法2.1・1.8・2.1）、桁行5間（12m）以上（柱間寸法2.4m等間）の南北棟で、いくつかの柱掘形は柱筋方向に長い長方形を呈する。S B 351はS B 350廃絶後の東西棟建物で、梁行3間（6m）、桁行3間（柱間寸法1.8m等間）以上である。柱掘形は一辺40～60cmと小規模である。

中世の遺構 中央区西端で検出したS B 321は、柱間2.1mの総柱建物の東南部にあたるが全体規模不詳。柱穴内やこれを切った耕作溝から黒色土器が出土しているので、平安時代にさかのぼると思われる。

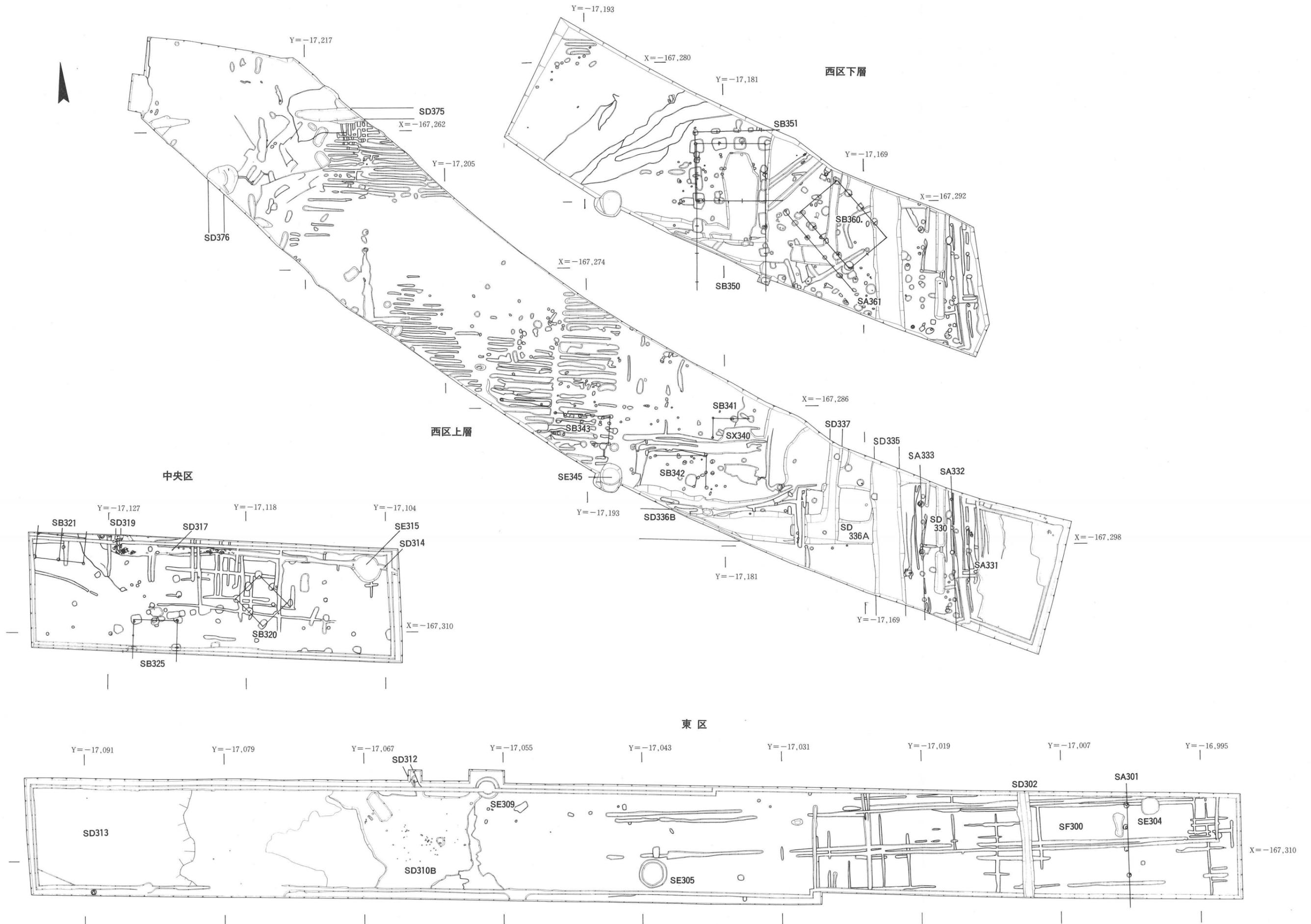


Fig.36 第75次調査遺構図 (1 : 300)

西区では四周に濠がめぐる12世紀末～13世紀の居館跡を検出した。居館は藤原宮期の造成面を再度小規模に整地して設営しており、関連する遺構として、濠の外側に溝1条、柵列3条、内側に井戸1基、掘立柱建物3棟以上、土器溜などがある。なお、中世の整地土からは、中世土器以外に8世紀後半代の土器（須恵器杯蓋、土師器甕・高杯・杯Bなど）もまとまって出土している。

四周の濠はすべて白色粘土層を含む同じ土で埋め戻しており、一連の濠であることは明白である。東濠S D 335（幅2.5～3.0m、深さ0.9m）は、当初、調査区の南北に延びていた（S D 335 A）が、後に南半部を埋め戻し、新たに掘削した南濠S D 336 Aと接続する（S D 335 B）。南濠S D 336 Aは幅2.0m、深さ0.3mとS D 335 Bより一段浅く、後にS D 335 Bの西側に掘削した新たな東濠S D 337（幅1.2m、深さ0.3m）と接続させた時に、幅2.6m、深さ0.6mと若干拡張している（S D 336 B）。これに対し、西濠S D 376（幅2.3m、深さ1.3m）と北濠S D 375（幅1.0m、深さ0.3m）の位置は調査区内では変更がない。東濠と南濠のみを掘り直したと仮定すれば、当初、東西57.5m（濠心々）、南北42.5m以上の区画を形成していた周濠のうち、まず南濠の位置を北にずらし、次に東濠を西に約5mずらして、最終的には東西52.5m、南北36.4mの区画に規模を縮小したことになる。各濠内から12世紀末～13世紀中葉（川越編年Ⅲ－A～C）瓦器碗をはじめとする中世土器片が出土したが、S D 335 A下層が川越編年Ⅲ－Aを主体とするほかは、その間に顕著な時期差は認めがたい。なお、最終的な周濠区画は、畑の段差や農道などの現在の地物によく対応する。

東濠S D 335の外側には、東3mを隔てて南北溝S D 330（幅0.9m、深さ0.7m）がある。埋土が濠と同じで、13世紀中葉（川越編年Ⅲ－Bの末期形態）の瓦器碗・皿、土師器皿が多数出土しており、居館跡にともなうことは明らかである。S D 330は調査区北端から約5mでいったん途切れ、さらに4m延びて終わる。途切れる位置は南濠S D 336の南肩の東延長とほぼ一致する。したがって、最終的な周濠区画に対応する時期の溝と判断する。S D 330の両側に柵列S A 331・332・333がある。S A 332・333は6間以上でさらに南北に延びており、東濠S D 335 A、すなわち、当初の周濠区画に対応すると思われる。

周濠内の井戸S E 345は区画内のやや東寄り、南濠S D 336に接して掘削されており、直径1.85m、深さ1.6m。少量の土器片が出土したのみで、井戸枠などは残っていなかった。区画内の中央部は後世の削平が著しく、居館の中核施設はまったく不明。南東部で小さなピットを多数検出したが、建物にまとまるものは少なく、わずかに東西棟3棟分の一部が指摘できるにすぎない（S B 341・342・343）。S B 341付近の南東斜面には13世紀前葉（川越編年Ⅲ－B）の瓦器碗・皿・土釜などが大量に廃棄されていた（S X 340）。

遺物

遺構にともなう土器類に関しては上記のとおり。顕著な遺物としてS E 305から出土した木

製匙がある (Fig.37)。全長41.9cm、身幅7.9cm、身高4.3cmで、柄の基端にパルメットを彫刻する。屈曲したパルメットの端を容器の口縁にひっかけて、容器内に落ち込まないように工夫している。柄の基端に同じ機能の装飾をほどこした刳物の匙や杓子は弥生時代に多いが、7世紀後半の例はめずらしい。

まとめ

宮に近接するにもかかわらず、左京七条二坊西南坪では、中央部の溜まり状によどんだ流路とそれにとりつく溝、東部の井戸2基、西部の掘立柱建物1棟のほかに藤原宮期の顕著な遺構は存在しない。坪の中央部は古くからの流路のために低湿地状を呈し、居住に適さなかった可能性もあるが、東部に井戸以外の遺構がないことは隣接する七条二坊東南坪や七条三坊など第74次調査区の様相と大きく異なる。また、第74次調査区では瓦片がほとんど出土していないのに、西南坪では井戸の埋土から完形平瓦が出土したのをはじめ、瓦片が比較的多数出土しているのがめだつ。調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にあたる。あるいは、紀寺付属の苑院などが一部北に延びていた可能性も考慮できるだろう。

左京七条一坊東南坪では、藤原宮期に飛鳥川右岸に点在する残丘のひとつを切り崩して整地し、造成地に大規模な掘立柱建物を建てている。検出した梁行3間、桁行5間以上の南北棟S B 350を東南坪の脇殿と解するならば、正殿は調査地の北、現在の春日神社南の高まり付近

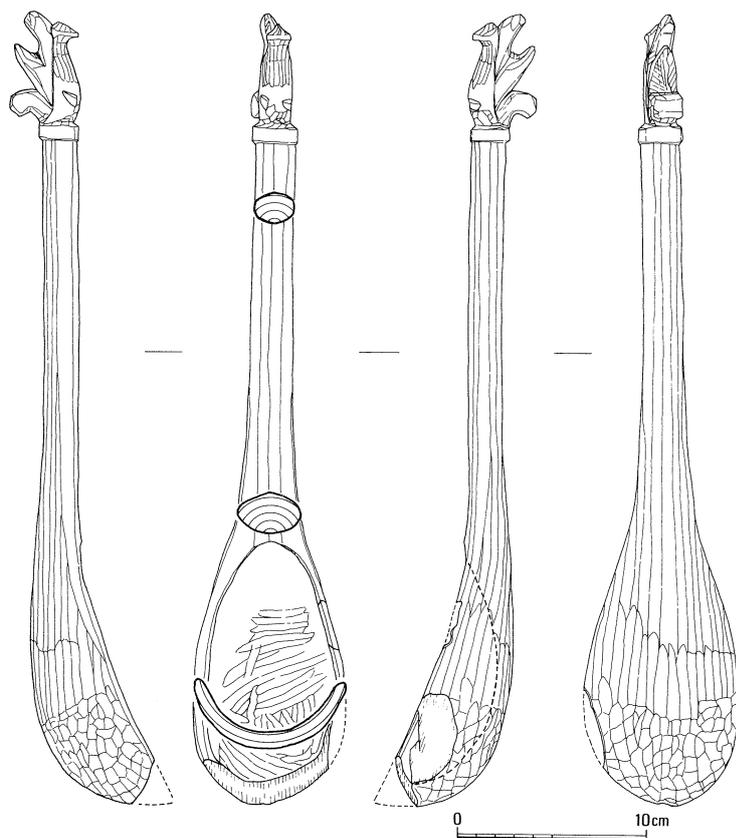


Fig.37 S E305出土木製匙 (1 : 4)

に想定できるかもしれない。東南坪の造成地は、中世に居館として再利用される。その整地土には8世紀後半の土器類が比較的まとまって出土しており、中世居館に先立って奈良時代にもこの造成地を再利用した可能性もある。中世居館の本体は削平されて残っていないが、方形にめぐる周濠からかなり大規模な施設が想定できる。

3 左京八条四坊（日向寺）の調査（第75-4次）

（1994年6月）

本調査は住宅建て替えに伴う事前調査として、橿原市南浦町で行ったものである。調査地は天香久山の南裾部で、左京八条四坊西南坪にあたる。東西6.5m、南北2.5mの調査区を設定した。層序は上から順に、現代盛土、灰色粘土、灰色粘土混黄褐色砂質土（整地土）、黄色砂質土（整地土）、黄褐色砂質土（整地土）である。黄色砂質土上面で遺構検出を行ったが、藤原京あるいは日向寺に関連する遺構はなかった。地表下1.2mで湧水が激しくなり、それ以上の掘り下げはできなかった。各整地土からは土器や瓦が出土しており、奈良時代や平安時代になり大規模な整地を行っていることは確かである。周辺地域の調査の進展が期待される。

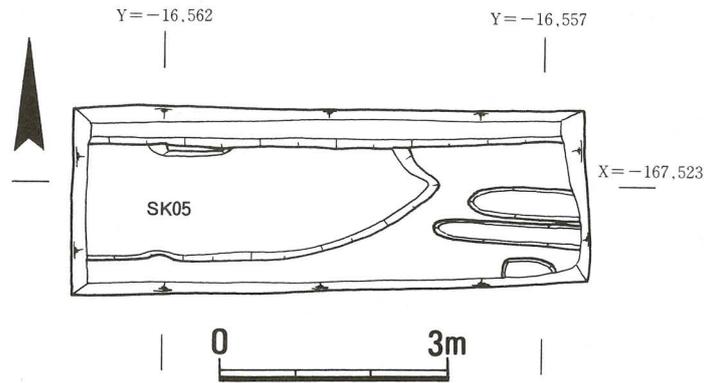


Fig.38 第75-4次調査遺構図（1：100）



Fig.39 第75-4次調査位置図（1：2000）

4 左京十一條三坊（雷丘北方遺跡第4次）の調査（第71-13次）

（1994年1月～4月）

本調査は、高市郡明日香村雷の北に計画された県道飛鳥樞原神宮前停車場線新設工事に伴う事前調査で、1991年に発見された雷丘北方遺跡の第4次目の調査である。従前の調査によって、雷丘北方遺跡は飛鳥川右岸で雷丘から小山に至る小丘陵との間の平坦地上に位置し、中心部に東西5間、南北4間の四面庇付東西棟建物（正殿）とその東西の2棟ずつの細長い南北棟建物（脇殿）からなる建物群を配し、それらの東、西、南を掘立柱塀と溝とで区画する構造とされている。第3次調査では南の掘立柱塀の中央には大規模な門状施設が無いことを明らかにしたが、あわせて東西脇殿の南妻柱列に柱筋を揃えた位置に同規模の東西棟建物（南殿）が存在することを確認し、中心部は正殿を囲む長大な掘立柱建物による長方形区画となることが判明した。遺跡は7世紀後半から8世紀後半代まで存続するが、建物群が形成されたA期と、正殿を建て替え、南殿を廃棄し周囲を礫敷に替えたB期とに大別され、さらにA期は溝S D 2730の造替などを根拠に1～3の小期に細分される。正殿が藤原京左京十一條三坊西南・西北坪の南北中軸線上にあり、東西脇殿は西北坪に入っていることから、遺跡は2町分を占めていたと考えられ、建物配置と占地の規模などから皇族を含む上級貴族の邸宅・宮殿あるいは京内に置かれた官衙である可能性が高いと想定されている。

今回の調査は、遺跡の東への広がり把握することと、第3次調査で確認された東西棟建物の全容を明らかにすることを目的とした。調査は前者について東限の掘立柱塀S A 2845以東に延びる東西溝S D 2730の東延長部および東限の南北溝の検出をめざして、南北10m、東西7～8mの調査区（1区）を設定して実施した。後者については当初、南殿想定地全域の調査を計画したが、諸般の事情で調査期間が限定され東西17間の建物全ての検出が難しい情勢となって、やむなく東9間分について南北12m、東西22mの調査区（2区）と西4間分について南北10m、東西10mの調査区（3区）を設定して実施したものである。以下、東の1区と南殿に関わる2・3区とにわけてその概要を報告する。

遺 構

1区 調査地の層序は、上から耕土、床土、茶灰色砂質土で、北半にはその下に黄色粘土と炭化物を含む灰褐色粘土が厚く堆積し、地山の青灰色細砂・青灰色微砂に至る。南半では茶灰色砂質土の下は灰褐色粘土細粒混じりの灰色細砂で、その下は青灰色細砂以下の自然堆積層となっている。後述するように北半の炭化物を含む灰褐色粘土層は下層溝を埋め立てた整地土である。

検出した遺構には東西溝S D 2730のほかに下層溝、土坑、井戸、石敷などがあるが、東限の南北溝は検出されなかった。整地土下で検出される前4者がA期に属し、茶灰色砂質土の下で検出される石敷等はB期に属する。

東西溝 S D 2730は幅約2.5m、深さ0.4mで埋土は暗灰色粘土混り灰色砂土である。溝は東限の南北塀 S A 2845以西では幅狭くなって南殿 S B 2850の南の溝につながり、そこでは石組溝への造替が確認されるが、今回の1区では北に寄せて掘り直した素掘溝 S D 2730Bが確認されるだけである。溝底の南北端には掘り直し以前の杭を4本確認しており、しがらみで護岸した素掘溝と思われる。埋土からは少量の7世紀後半代の土器と砥石が出土した。溝は長さ6m分を検出したが、調査区の東外方へなお延びており、東限の南北溝は検出されなかった。したがって遺跡は東区画塀 S A 2845の東10.5m以上まで広がっていることになる。

下層溝 S D 3240は石敷 S X 3256などの下で検出した。溝全体は東で北へ傾く方位をもち、南から約4mが深さ0.5mと深いが、以北は深さ0.3mで調査区北外方に広がっている。溝底には流水の形跡が無く、北下がり層をなす暗灰粘土・黄色粘土・灰褐粘土の間に炭化物層が薄く堆積することから、全体が埋め立て整地土層である可能性がある。ただその場合でも、後述の土坑はその堆積層の中程から掘り込まれており、一度に埋め立てたものではない。炭化物層など下層から7世紀末の土器と墨痕のある削り屑、凸面布目平瓦片などが少量出土し、上層には長さ2.5cmの円棒に小孔をあけた土錘状の土製品が、最上層には「嶋女」の墨書をもつ奈良時代の須恵器蓋がある。

土坑 S K 3245は下層溝 S D 3240の堆積層中程から掘り込まれた直径0.5m、深さ0.3mの小規模な土坑で、表に「恵思和上三」、裏に「祥□□」と書いた荷札木簡と少量の土器が出土した。

井戸 S E 3250は石敷 S X 3255直下の整地土下面から掘り込む。直径1.6~1.8m、深さ0.7mの規模で、埋土の暗灰褐色砂土は中凹みに堆積し枳板などは検出されなかった。埋土からは7世紀末の土器や銅片が出土し、土師器甕片には「寺(?)」の墨書がある。北岸は大官大寺式軒平瓦などを含む瓦礫群 S X 3247で覆われ、南岸は先の土坑 S K 3245の一部を壊している。

石敷 S X 3255は幅0.6mで東西方向に細長く延びる。第3次調査東区の石敷 S X 2851の東延長部にあたり、調査区中央までの長さ2.5m分を検出ただけで東半では検出されなかった。

石敷区画 S X 3256は東と西と南の辺が直線をなし、北は石敷 S X 3255の南に連なって、東西幅1.2m、南北幅1.5mの長方形区画を形成する。この規模は第3次調査区の石敷区画 S X 2849の内部と類似しており、用材の一部と直上に縄目叩きの平瓦が、直下の整地土に飛鳥V期の土器が含まれる点でも S X 2849と同様で一連の施設と思われるが、石敷 S X 3255とともに用途は明らかでない。

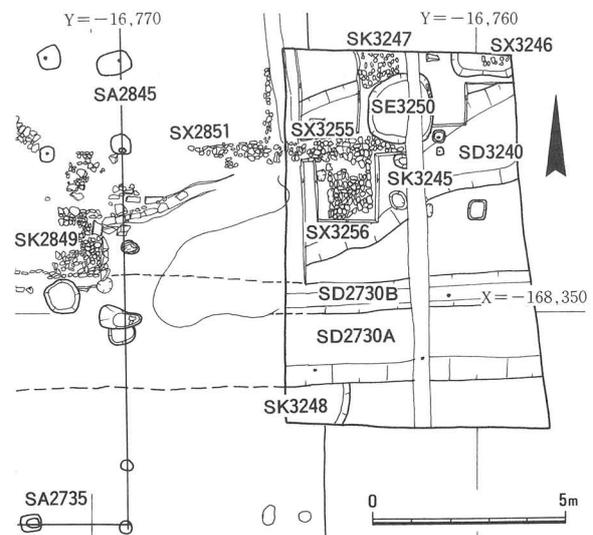


Fig.40 第71-13次調査1区遺構図(1:200)

2・3区 基本層序は1区と変わらないが、灰褐色土の下には全域に奈良時代後半までの土器を含むB期の礫敷が広がる。その下は、2区では南半部に黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の整地土があり、暗青灰色細砂の地山に至る。暗青灰色砂は自然河川状の堆積層で古墳時代前半の土器を含む。3区では黄色粘土の整地は顕著でなく、茶褐色粘質土が地山の上のっている。

検出した主な遺構は既出の建物S B 2850と東西溝S D 2730であり、新たに検出した遺構はそれらに関わる石敷S X 3261、暗渠S X 3275などのほか、2区の北側の浅く不整形な土坑数基と柱穴を壊す方形土坑等があるに過ぎない。

S B 2850は、第3次調査で東妻柱列と中央部南側の6間分の柱穴を確認し、第2次調査で検出していた柱根3本を北側柱列の一部とみて東西17間、南北2間の身舎に南庇のつく建物を想定した。今回は建物東半の2区で、第3次調査区で検出した柱穴に加えて新たに、北側柱9本、南側柱・南庇柱各4本を検出し、西半の3区では南側柱、南庇柱各3本のほか、西妻柱列を想定通りB期の南北石組溝の下で検出した。これによって建物は第3次調査の想定通り、桁行17間（約40m）、梁行2間（4.7m）であり、後に2.35mの出をもつ南庇がつくことが確定した。なお、第2次調査の3本の柱根については、柱間が不揃いで、柱筋も異なっていたためにA期の建物とみなさなかったが、再検出の結果、それは柱が著しく傾いていることによるもので、柱の基底部では柱筋、柱間ともに揃っていることが判明した。

身舎の柱掘形は平面1.2×1.4mの長方形を呈し、柱筋方向に長い傾向がある。深さ1.2mで直径25cmの柱根が遺存するものがある。なお、身舎東南隅の柱穴に残る柱は直径15cmと細く、深さも40cmしかない。これはこの柱位置が北に寄っていることと、これとは別に柱痕跡が認められることから、床束等の別の用途の柱と考えられる。庇の柱掘形は一辺1.0m、深さ0.7mで、柱は直径15cm程と細い。柱掘形は黄色粘土の整地土上面から掘り込まれるが、この黄色粘土は東西石組溝S D 2730Bの裏込めとなっており、庇がA-2期になってつけ加えられたことは確実である。

また、第3次調査ではこの建物はB期には取り壊されて礫敷となることが確認されており、礫敷を除去した検出面には建物の旧床面の状況が残されている可能性が高いと期待された。精査の結果、柱根や柱痕跡を貫くように幅30cm弱の浅い灰色粘質土の帯S X 3263が確認され、南側柱列の東端間では同じ幅に川原石を並べた石敷S X 3261とその抜き取り痕跡S X 3262が検出された。これらはちょうど柱筋を貫いて存在することから、柱間をつな

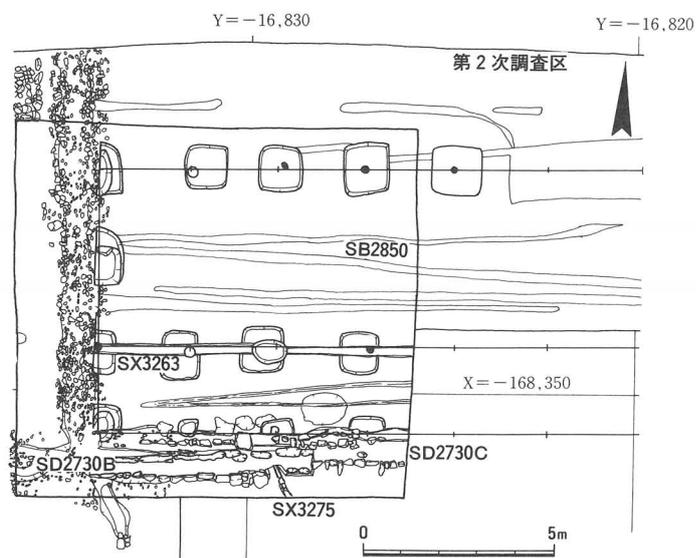


Fig.41 第71-13次調査3区遺構図(1:200)

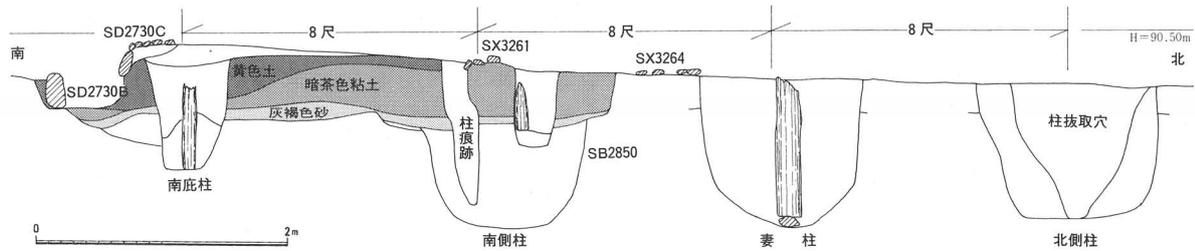


Fig.42 S B2850・S D2730・整地土の土層模式図 (1 : 60)

ぐ壁をうける地覆とその痕跡と考えられ、建物内部は石敷あるいは土間であった可能性が高い。

なお、調査の過程で北側柱列については明瞭に柱掘形が検出されたが、南側柱と底柱については極めて困難であり、既に露出している柱根や明瞭な柱抜取穴にひかれて、埋土の乱れた部分を最大限評価して柱掘形とした。しかし、柱穴を断ち割って精査した結果、南側柱列の掘形については検出面下約50cmの黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の下から掘り込んでおり、本来整地土上面では検出されるはずのないことが判明した (Fig.42)。この検出面の違いは、建物建設時に南半については一段低い状況であったのか、あるいは、建設後にその高さまでの土を除去したかのどちらかであり、建った柱をそのままに先の3層の整地土を施したことを示している。いずれであるかを明確に示す手がかりはないが、整地土の最下層灰褐色砂は建物の東半部に限定的にみられるにも関わらず、水平で均一な厚さを持ち、土質も洪水に際しての堆積砂をおもわせること、さらに検出面の高さが整地土のみられる範囲すなわち建物の棟通りの北約1mより南については、緩やかな傾斜で約15cm高くなっており、その起伏は建物廃絶後の礫敷段階にも引き継がれていることに注目すると、建築後のある時期に南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げた結果であると推定するのが妥当であろう。その場合、流失はA-2期以前のこととなる。

S D2730にはA、B、Cの造替がある。造営当初のAは幅約1mの素掘溝であるが、大半を

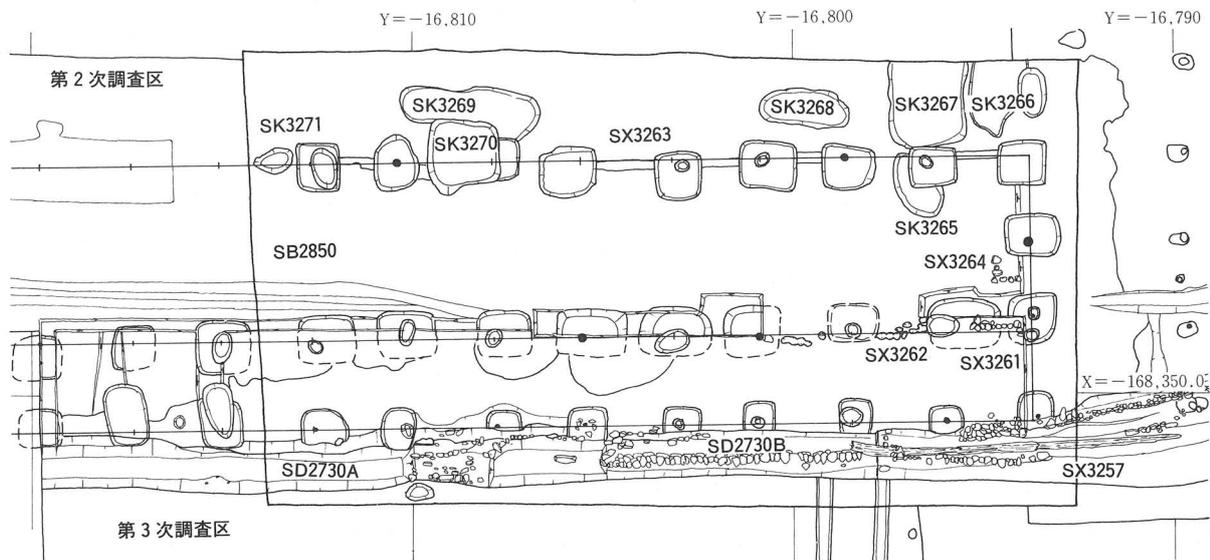


Fig.43 第71-13次調査2区遺構図 (1 : 200)

Bに壊されていて独自の堆積層は極めて薄い。第3次調査の所見では東脇殿S B 2830までは南妻柱の南1mに北岸をもつ幅3mの溝であるが、東脇殿の西南隅から北岸が南に寄るように幅を減じ、S B 2850の前面では南側柱から約2.5m離れて北岸があるとされる。前述のようにA-1期の建物S B 2850には庇が付かないから、建物前面に空地ができることになるがその理由はわからない。

S D 2730 Bは素掘りのAを東脇殿の西南隅からS B 2850の前面について黄色粘土で埋め立て、それを裏込めとして南北側石を並べて石組溝とした段階で、幅0.4m、深さ0.3~0.4mで底石はない。側石は東半では0.5m大の川原石を2~3段に積み上げるが、西半では比較的大型の石1石を立て並べる傾向があり、一部平面方形の石が南北両岸に向かい合った箇所がある。建物S B 2850の南庇の柱掘形との重複関係からは、南庇と共存する。S D 2730 Bの南岸には建物西端から2間目の柱の前に暗渠S X 3275が敷設される。暗渠は行基式の丸瓦を重ねた構造で、東南から西北に向かい溝Bに流れ込む。溝Bの埋土からは円面硯のほか須恵器平瓶、鉢、土師器杯、鉢や墨痕のある木片などが出土し、須恵器鉢には全面に黒漆が塗布されている。

S D 2730 Cは石組溝Bを埋め、小型石1石だけを並べた小規模な雨落溝とした段階で、溝は幅0.3m、深さ0.2mで、北岸には建物寄りのやや高い位置にいま一列の石列が設けられた形跡がある。それらの石列が庇柱筋に一致していることから、この時期はまだなお建物が存続していると考えられる。西半部では、石組溝Bが西に向かって下降していたのにあわせて、西に厚く盛り土を行ってから石を並べていて、溝S D 2730 Cはほとんど傾斜をもたない。

建物S B 2850の東南部にある角材を埋めた溝状土坑S X 3257は礫敷きの下で検出され、石組溝Bの南側石を壊している。この関係からは角材の埋置がA-3期かB期かは判然としない。しかし、角材は溝幅0.3mで復原される溝Cの南側石に重なる位置にあるから溝Cとの併存はあり得ず、角材はB期の造成にともなって埋められたことになる。角材は長さ7.5mで一端の長さ2.2m分が円形に加工され、残された釘穴の間隔が4.7mであることから、柱間8尺の建物の桁材であり、上に被せた幅25cm、厚さ5cmの板材とともに、B期には取り壊されている建物S B 2850の用材とみられる。

2区の北に散在する土坑S K 3266~3269は不整形で浅く、埋土の暗灰色粘土には7世紀後半代の土器片と腐朽した木片が含まれている。いずれも建物S B 2850の北側でおさまることから建物造成時の整地の一部と考えられる。また柱穴を壊す方形土坑S K 3270は一辺1.7m、深さ0.7mの規模で、中に大量の礫が詰められている。機能や時期は明らかでない。

まとめ

南殿と遺構の変遷 今回の調査の結果、遺跡の中心区画の南殿S B 2850は、第3次調査の想定通りの規模でA期に存在し、1~3小期の変遷をへてB期には廃絶することが確認された。A-1期の掘立柱建物S B 2850は東西17間、南北2間の東西棟建物で、南庇はなく、柱間は桁行梁

行とも8尺等間であり、南側柱列が東西脇殿の南妻柱と揃い、東西妻柱は東西脇殿の側柱からそれぞれ約6.3m離れた中央に位置している。その後の変遷をたどると、A-2期の直前には洪水等に見まわれ、それを契機として、南半に整地がなされ、素掘溝SD2730Aを石組溝SD2730Bとし、建物に南庇を付加するなどの改造が行われたと推定される。そして、A-3期には東脇殿に南庇をつけ加え、石組溝SD2730Bを小さな石組溝SD2730Cに作り替えるが、この建物に関しては改造は認められない。さらにB期にいたって、他の建物は存続するのに対して、この建物は廃絶され広く全域が礫敷きとなる。

また、側柱列で検出した壁地覆の痕跡から、A-2期以後の建物内部およびB期の礫敷面には、建物棟通りに平行して南が高い起伏が存在することが判明した。起伏のある床面は通常の建物利用にとっては不都合であろうが、黄色整地土の状況から推定した通り、ある時期に建物の南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げたとすれば、形成された理由は理解される。

建物の造営と改修の年代については、石組溝Bの埋土に飛鳥IV~Vの土器があり、A-2期の廃絶が飛鳥V=藤原宮期の1時点のことと知れ、礫敷中に奈良時代後半の土器が含まれることから、B期はその時期まで存続したことが確認される。したがって、A-1期は7世紀後半代に始まり、B期の改造がなされるのは奈良時代に入ってからと推定されよう。

なお、遺跡の性格については建物配置から上級貴族の邸宅、宮殿あるいは京内官衙と推測され、今回の調査を含めた出土土器に大型の供膳具が目立ち、黒漆塗の須恵器鉢があって上級の貴族階層の什器とみられることと矛盾しない。しかし、伴出する文字資料は今回の荷札木簡の人名「恵思和上」をはじめとして仏教的色彩が濃く、土器類も寺院での什器とみることも可能である。であれば出土遺物の内容は直接に遺跡の性格を示さないことになる。瓦類についてもこの遺跡の建物に葺かれたものではなく、何度かの改造に際して近在から持ち込まれたものと推測されており、今回の調査で出土した遺物の多くが1区の下層溝や2・3区の石組溝SD2730Bなどの埋め立て整地に伴うことを重視すれば、土器にも瓦や木簡と同様に近在の遺跡から持ち込まれたものが含まれている可能性があり、なお慎重な検討が必要であるとおもわれる。

東外郭堀以東の状況 調査区内では、東限堀SA2845に平行した南北溝は確認されず、長方形区画に南接する東西大溝SD2730はなお東に延びていて、遺跡の東限の様相は来年度以降の調査に待たねばならない。また、東西溝と同時かそれ以後に形成された下層溝とその埋め立て整地土は、第3次調査東区では整地土の違いとして認識されており、今回の調査区の北、東へものびている。出土遺物からは7世紀後半から末の時期に限定され、A期のこの地域は沼のような凹みであったと考えられる。下層溝の広がりや性格を含めて詳細の解明は来年度の調査に委ねたい。

5 左京十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査（第75-3次）

(1994年6月～7月)

本調査は、県道樞原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事にともない、明日香村雷において実施したものである。県道の拡幅部分の雷交差点以北については、1993年度に第71-9・10・14次調査を実施しており、7世紀前半から平安時代初めにかけての遺構を検出し、そのうち、奈良時代中頃から平安時代初めにかけての遺構は、小治田宮に関係するものと推定されるに至った(『概報24』)。その結果、建物の規模や配置を最終的に確認するために、現在の道路部分も調査する必要が生じた。そこで、拡幅部分の工事の終了を待って、前回調査できなかった旧道路部分と、「雷池」の東に新設される広場予定地の調査を実施することとなった。しかし、旧道路の西にある倉庫等への車両進入路を確保する必要上、調査区の設定にはいくつかの制約があり、結局、南区・中区・北区にわけて調査することとなった。調査面積は約500㎡である。

南区 現道路下には、NTTの電話線、都市ガス管及び県営水道の水道管がほぼ並行して埋設されており、遺構面はこれらの掘形によって寸断されている。また、戦前にこの道路が建設された時の削平も著しい。南区の南半は、路床の直下、及び畑の床土直下が花崗岩の風化した岩盤となるが、北半では岩盤が急激に落ち込み、斜面を整地した黄褐色砂質土と粘質土からなる

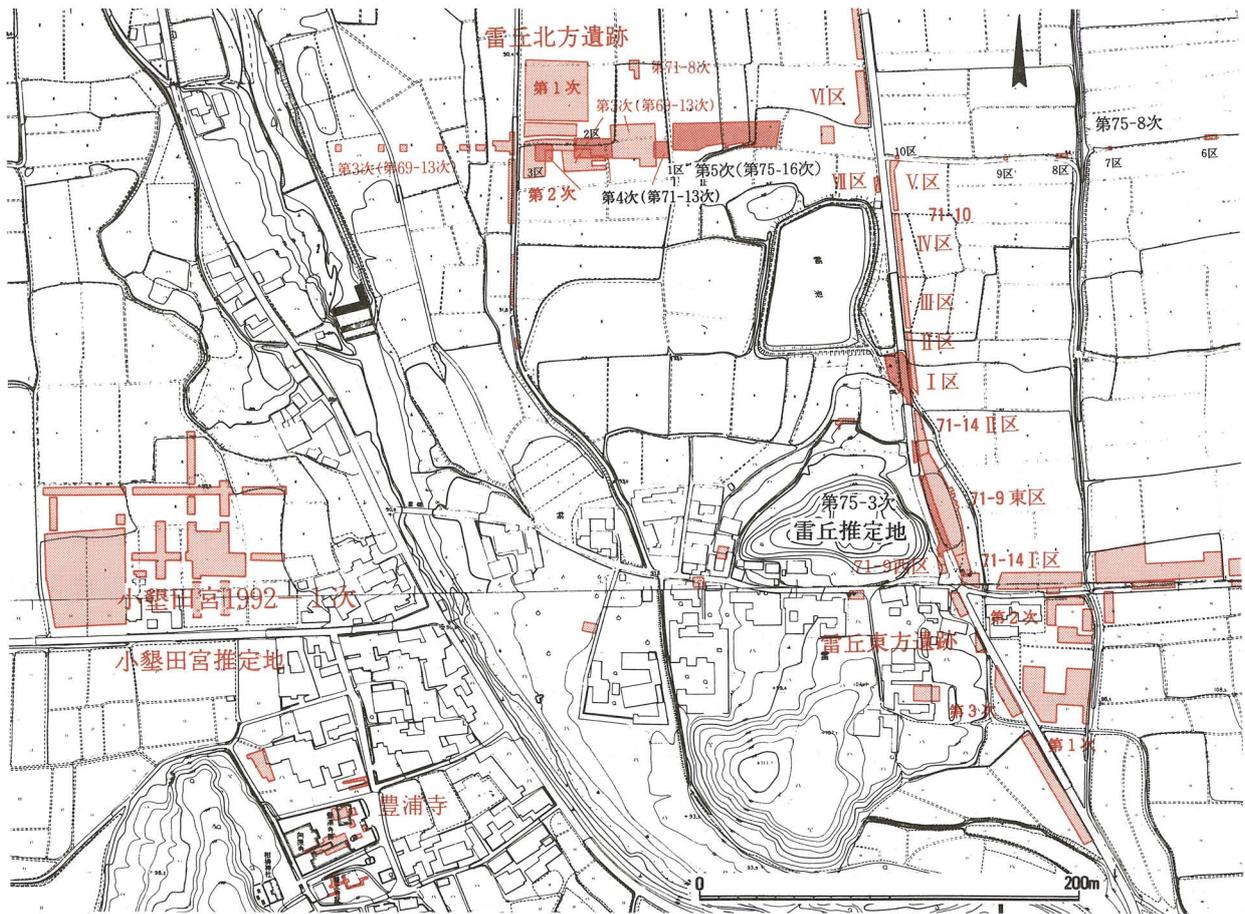


Fig.44 第75-3次調査位置図(1:4000)

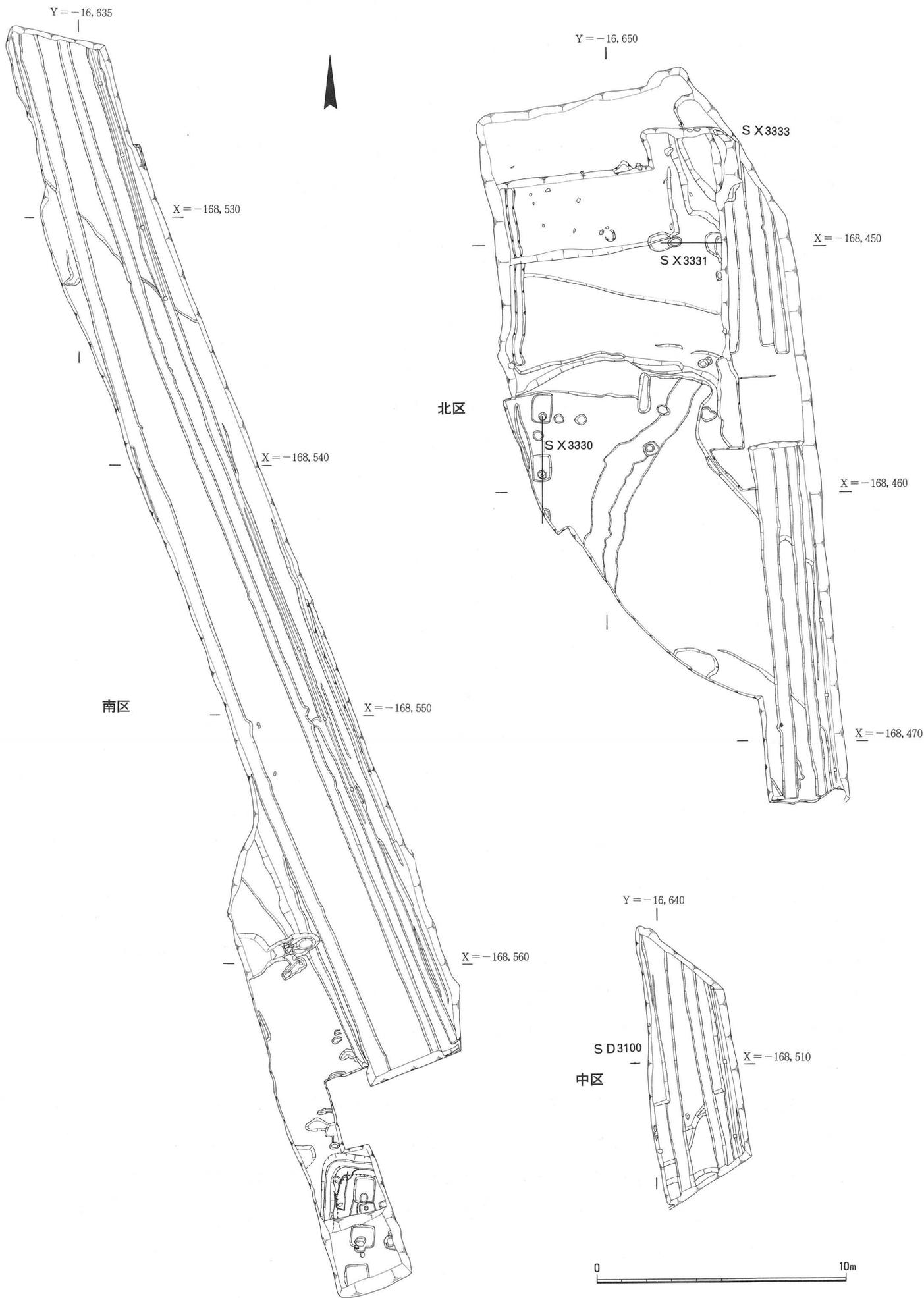


Fig.45 第75-3次調査遺構図 (1 : 200)

整地土層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、礎石建物 S B 3030 などがある。調査区の東壁断面で、前回調査で検出した礎石建物 S B 3030 の南西隅の礎石抜き取り穴 1 カ所を検出した。礎石の据え付け掘形の大きさは、南北 1.4m、深さ 0.3m あり、礎石抜き取り穴には瓦片を含む。これで S B 3030 の規模は 3 × 3 間の総柱建物であることが確定した。南区の北方では、地山の花崗岩岩盤が急激に落ち込み、黄褐色砂質土と粘質土からなる整地土が厚く堆積するがほとんど遺物を含まない。なお、これ以外に、調査区の南西部で戦前に操業していた炭焼き窯 1 基を検出した。

中区 中区では、電話線・ガス管・水道管による破壊をのがれた範囲でほぼ全面にわたって遺物包含層を検出した。この包含層を掘り下げると南西から北東方向にひろがる溝状土坑となり、前回、71-14 次調査区で検出した下層大溝 S D 3100 の西延長部分にあたることを確認した。幅約 6 m、深さ約 0.8m あり、土層の堆積状況や遺物の出土状態は前回と同様であり、7 世紀初めから前半代の土師器・須恵器が出土した。

北区 道路部分と、その西の広場予定地を調査した。広場予定地は、かつて雷丘の北麓に沿ってめぐる 3 段ほどの棚田として利用されていたが、その後、土砂・廃棄物の仮置き場として長い間使用されていた。旧道路下では、ここも電話線などによってほとんど破壊され、雷丘の北麓の旧地形を一部で確認したにとどまる。また、前回の 71-10 次調査で検出した土塁状のたかまり S X 3130 や、その南側にある大溝 S D 3131 の西延長部には、電話線の大型マンホールが設けられて徹底的に破壊されており、その延長部分はもちろん、その有無すら検討できなかった。調査区内で検出した遺構は希薄であるが、掘立柱建物の一部をなすと考えられる柱掘形 3 箇所からなる S X 3330 と、掘立柱東西塀の一部と思われる柱掘形 2 箇所からなる S X 3331、丘陵の北東部を限るとみられる大溝 S X 3333 の西岸を検出した。遺構は、この辺りの地山を形成する砂礫まじりの黄褐色粘質土上面で検出した。

S X 3330 の柱掘形の大きさは、南北 1.2m、東西 0.8m、深さ 0.3m であり、直径 0.2m 程の柱痕跡が残る。柱間寸法は、2.3m ほどであるが、柱掘形はかなり削平されている。柱掘形から 7 世紀後半（飛鳥 IV 段階）の土器が出土した。

S X 3331 の柱掘形の大きさは 1 m 前後、深さは 1.1m ほどある。柱掘形から 7 世紀後半（飛鳥 IV 段階）の土器が出土した。

S X 3333 は、その西岸の一部を検出しただけであるが、地山をなす青灰色の砂礫層を深さ 2 m 近く掘り下げた大規模な遺構である。埋土中に黄色粘土の塊が大量に含まれていることから、埋め戻されたものと推定される。7 世紀前半から後半（飛鳥 I ~ IV 段階）の土器と瓦片が少量出土した。規模や性格は不明であるが、雷丘の北に舌状に張り出した台地北端に沿って掘られた大規模な溝になる可能性が高い。

6 左京その他の調査

A 左京五条三坊の調査（第75-10次）

(1994年10月)

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は推定左京五条三坊の東南坪と東北坪にまたがり、五条々間路の検出を主目的とし、南北15m、東西3mの調査区を設定した。しかし、五条々間路は検出できず、検出した遺構は藤原宮期に先行する斜行溝1条、藤原宮期の柱穴2個および溝状の落込み、中世の小穴群である。基本層序は地表面から耕作土、床土、黄灰色粘土で、遺構はすべて黄灰粘土の地山面で検出した。

藤原宮期以前の遺構 SD 8260は調査区内でくの字に折れ曲がる斜行溝である。溝は南から北へ流れ、溝底のレベル差は調査区の南北で25cmである。溝内の遺物は少なく布留Ⅱ式の土器が出土しており、4世紀末期の溝と推定する。

藤原宮期の遺構 SB 8250は南北3.6mを隔ててある2個の柱穴である。柱掘形は約1mの方形で、現存する深さは40cmである。発掘当初は、2個の柱穴の南北延長線上には柱穴が無いことから、身舎梁行全長が3.6mの東西棟と考え、北側の柱穴の西延長を拡張し柱穴の存在を求めた。しかし、柱穴の存在は確認出来なかった。現状では梁行1間(3.6m)、桁行不明の建物と考えておく。

発掘区西南にあるSX 8245は、溝状の落込みである。北端は溝状に途切れているが、未発掘区でどのような広がりをもつかは不明である。発掘区内で確認できる落込みの底は遺構面から約25cm下がり、底面には扁平な拳大の石が散見される。何等かの用途として人為的に置かれた可能性もある。埋土からは飛鳥V期の土師器・須恵器が出土しており、この施設は藤原宮期の施設である。また、埋土内からはスサ入の壁土が出土した。

なお、五条々間路は予定位置で確認できなかったが、SB 8250の残存状況からして、例え調査区内に五条々間路があったとしても、後世に削平された可能性が高い。

中世の遺構 瓦器を伴出する小穴を17個検出したが、どのような建物にまとまるかは不明である。

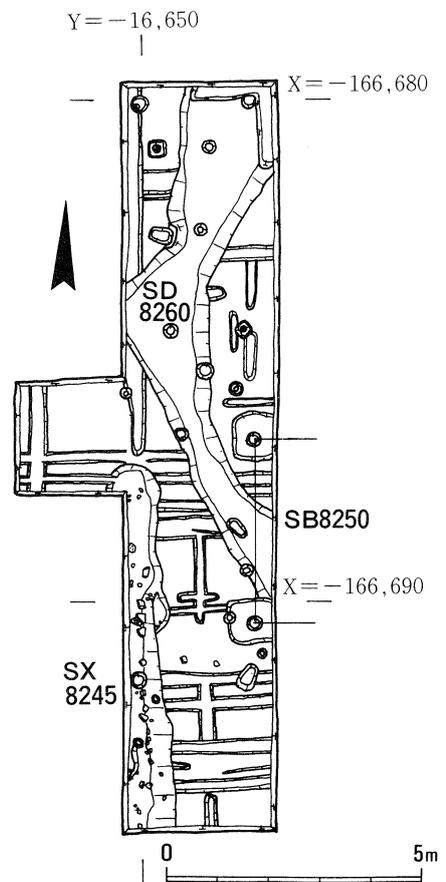


Fig.46 第75-10次調査遺構図(1:150)

B 左京十一條四・五坊の調査（第75－8次調査）

（1994年8月）

本調査は、下水道工事に伴う事前調査として明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山の集落西端から、県道檜原神宮東口停車場飛鳥線に至る東西道路上で、藤原京左京十一條四・五坊にあたる。調査は、竪坑の範囲を対象とし、東側から1区～10区とした。このうち1・3・5・7・9・10区で東西2m、南北2m、2・4・6・8区で、東西6m、南北2.4mの発掘区を設定した。2区が中ツ道（東四坊大路）、9区が東三坊大路の想定位置にあたる。1区については、湧水が激しく発掘区の西側に隣接する小河川への影響を考え若干掘削ののち調査を断念した。なお遺構図は、条坊に関わる2・9区のみ図示している。

2区では、現路面下1.1mにある灰色砂層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、古墳時代前期の土坑 S K 3336、7世紀代の南北小溝 S D 3337（幅30cm深さ20cmほど）、時期不明の土坑群 S X 3335である。中ツ道に関わる遺構は確認できなかった。

4区では、現路面下1mにある明茶褐色土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、弥生時代中期の土坑1基、古墳時代中期の土坑1基、平安時代前期の土坑2基である。

6区では、現路面下1.3mより、発掘区の全面で旧河川の堆積土である黄灰色粘質土、灰色極粗砂等が認められた。この堆積土は、現路面下1.8mまで続いており、川底は確認できなかった。旧河川に含まれる遺物は、古墳時代から藤原宮期までの須恵器、土師器である。

9区では、現路面下1mにある黄褐色粘土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、7世紀代の南北斜行溝 S D 3344（深さ30cm幅30cmほど）、時期不明の南北小溝1条である。東三坊大路に関わる遺構は確認できなかった。

3・5・7・8・10区については、それぞれ現路面下1m前後で遺構検出を行ったが、時期不明の小溝や土坑を検出したのみである。

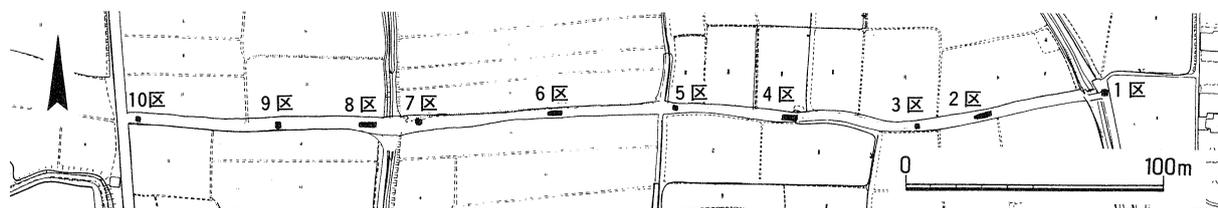


Fig.47 第75－8次調査位置図（1：3000）

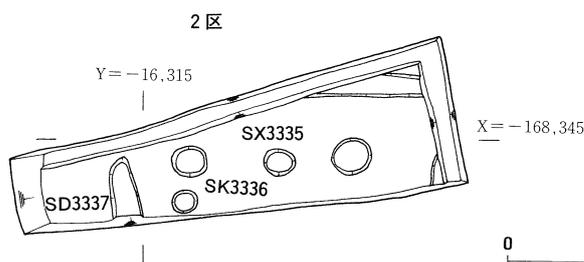


Fig.48 第75－8次調査2区遺構図（1：100）

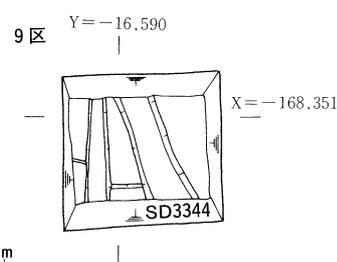


Fig.49 第75－8次調査9区遺構図（1：100）

7 右京七条二坊の調査（第75-11次）

（1994年10月～11月）

本調査は、橿原市四分町256-3・12・13において、県道の建設に伴う事前調査として実施した。調査面積は約528㎡である。

当該地は弥生時代の四分遺跡の南端付近にあたり、7世紀後半の藤原京期には藤原京の六条大路と西二坊大路の路面敷、および右京七条二坊西北坪の一部にあたる。さらに周辺の調査では、中世（12～13世紀）の遺構も見つかっており、これに関連する遺構も期待できるところである。

遺 構

調査区の層位は、表土直下に飛鳥川堤防の盛土が厚く堆積し、以下、中世以降の堆積層、中世と藤原京期の遺構がある暗褐色粘土層、さらに弥生後期の包含層である暗茶褐色粘土層（厚さ50～60cm）、基層の茶褐色粘土ないし緑色砂岩層に移行する。

遺構は暗褐色粘土層、および暗茶褐色粘土層の上下2層にわたり検出した。上層遺構には掘立柱建物3棟、掘立柱塀3条、井戸1基、溝1条、土坑があり、下層遺構には土坑10基、中世以降の耕作に関わる東西および南北溝が多数ある。

以下、主要な遺構について述べる。

S B 8290は、桁行4間以上の東西棟建物である。梁行規模は不詳である。桁行の柱間寸法は東の端間が1.7m、他は2.4m（8尺）である。

S B 8291は、S B 8290に重複する南北棟建物である。北の妻側柱のみを検出。柱間寸法は1.3mと1.6mである。

S B 8292は、S B 8290・8291に重複する建物である。東北隅柱のみを検出した。桁行、梁行ともに規模は不詳である。

S B 8296は調査区の北端で検出した中世の建物である。桁行・梁行ともに1間分を検出した。柱穴の掘形は直径・深さともに20cm程度と小さく浅い。柱間寸法は1.7mである。

S A 8293は、掘立柱東西塀で3間分を検出した。柱間寸法は2m前後である。この塀の北は六条大路南側溝の推定位置にあたり、右京七条二坊西北坪を区画する施設の可能性がある。

S E 8297は、中世の井戸である。掘形の直径は2.5m、検出面からの深さは2.0mである。抜き取りが、井戸底にまでおよぶ。一部に玉石が残っており、もとは石組の井戸だった可能性がある。井戸の抜き取りからは、曲物や毬杖キチヨウの毬の可能性のある木球、12世紀代の瓦器碗などが出土した。

S D 8298は、発掘区の東端で検出した南北溝である。一部を確認したのにとどまり、溝の規模は不明である。溝内の堆積層から瓦器碗が出土した。隣接調査地で検出している中世の溝と

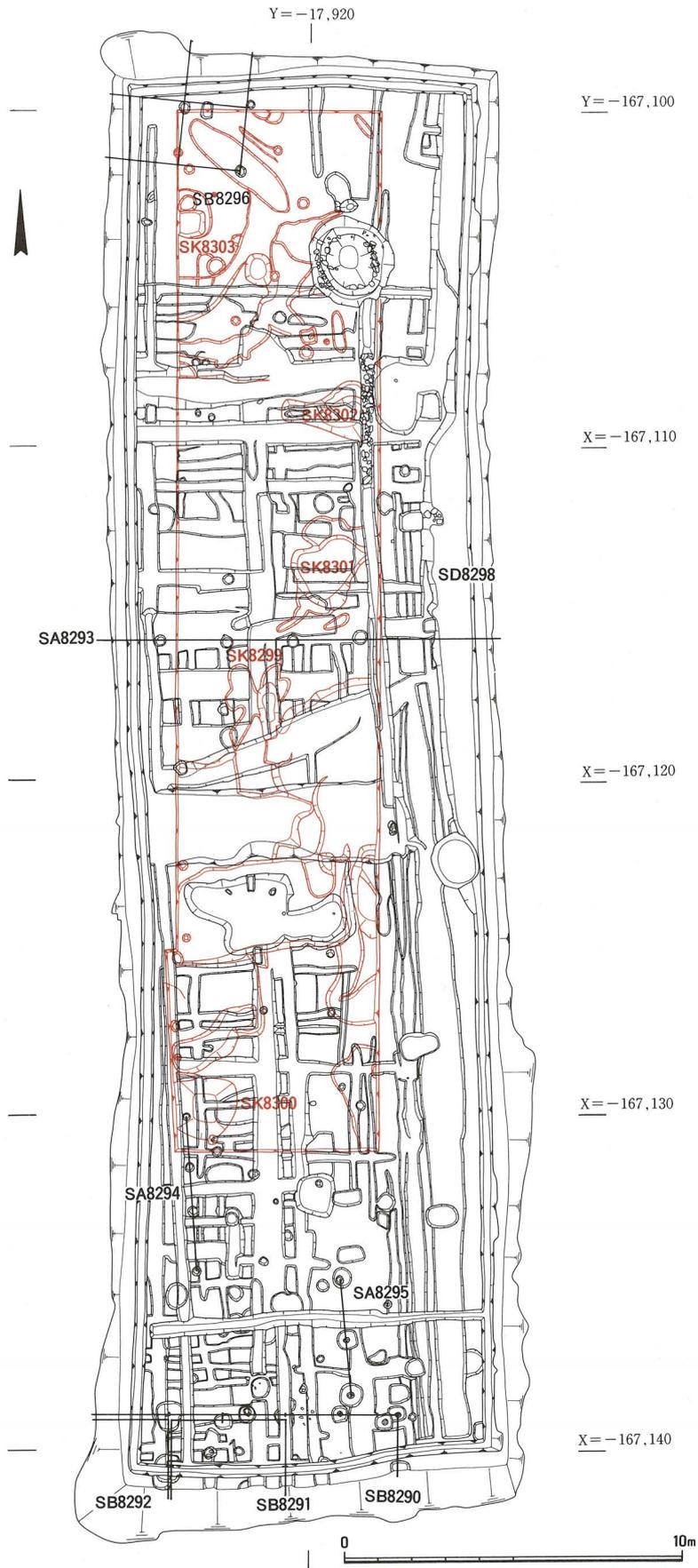


Fig.50 第75-11次調査遺構図 (1 : 200)

一連であろう。

S K 8300は、下層で検出した弥生時代後期の土坑である。直径約2 mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.5mである。

S K 8299は、下層で検出した弥生後期の土坑である。最大辺長約2 mの不整形土坑で、検出面からの深さは0.3mである。

遺物

遺物の大半を占めるのは、下層の土坑から出土した弥生後期の土器である。これは破片のみで、完形になるものはない。上層遺構に伴う遺物には、中世の井戸抜き取り穴からの出土品がある。これには、瓦器椀、瓦器小皿、土師器皿、羽釜および曲物、木球および板状品がある。瓦器の年代は12世紀代である。木球は広葉樹の幹を削り成形したもので、やや扁平であるが毬杖キョウの毬キョウであろう。大きさは7 cm×6.5cm、厚さ4 cm。曲物は直径25cm、高さ15cmで、端部をかばカバ(桜の樹皮)で綴じ合わせる。藤原京期の土器は、少量である。

まとめ

検出した遺構は中世、藤原京期、弥生時代の3時期がある。このうち藤原京期では、右京七条二坊西北坪を区画する施設である可能性が強い東西塀S A 8293と、建物3棟を検出した。調査区が道路敷地という制約もあって、他に関連する遺構は見いだせなかった。

建物は3時期の重複があり、S B 8292→S B 8290→S B 8291と変遷している。

調査の最大のねらいであった六条大路南側溝は、検出できなかった。大路南側溝の推定位置である調査区の北半部には、藤原京期の包含層といえるものはなく、この時期の遺構面と中世の遺構面は同一である。この状態からみて、六条大路南側溝は中世に削平を受け、遺存しなかった可能性が強い。

弥生時代の主要な遺構は土坑群であり、四分遺跡の南端を画する施設などは検出できなかった。また、弥生後期の遺物包含層も調査区全体に広がることからみて、四分遺跡の範囲は従来の推定を超え、調査区のさらに南側にまで広がる可能性がでてきた。この点は、将来の調査に委ねなければならない。

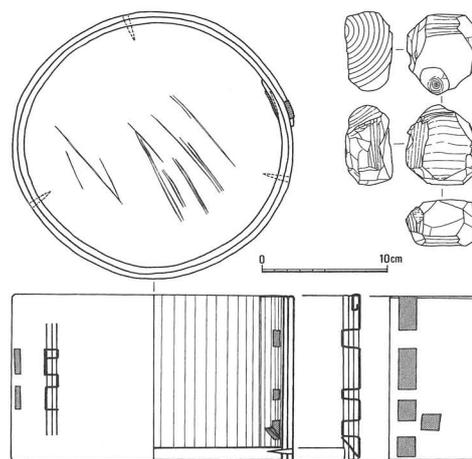


Fig.51 S E 8297出土木製品 (1 : 6)

8 本薬師寺の調査

A 本薬師寺1993-3次調査

(1994年2月～4月)

檀原市城殿町にある本薬師寺跡には、現在も金堂と東西二つの塔の土壇そして多数の礎石が残っている。本薬師寺跡では、これまで8回の発掘調査を実施し、金堂・中門・南面回廊などについて成果をあげてきた。今回は前年度の中門・南面回廊の調査に続く計画調査で、東塔の基壇規模と周囲の状況を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査は1994年2月10日に開始し、4月15日に終了した。調査面積は276㎡である。

基本層序

調査地の現況は水田である。調査区の層位は上から順に、水田耕作土（厚さ約20cm）と水田床土（厚さ約15cm）、灰褐色土や暗黄灰褐色砂質土などの遺物包含層、凝灰岩の細片を含む暗褐色砂質土、粘土混り暗灰色砂質土、暗灰色砂質土である。本薬師寺に関係する遺構は、遺物包含層の下、伽藍造営時の整地である暗褐色砂質土層の上面で検出した。

遺構

東塔跡には現状で、南北13m、東西16m、高さ約1mの土壇が残る。土壇上には舍利孔をもつ

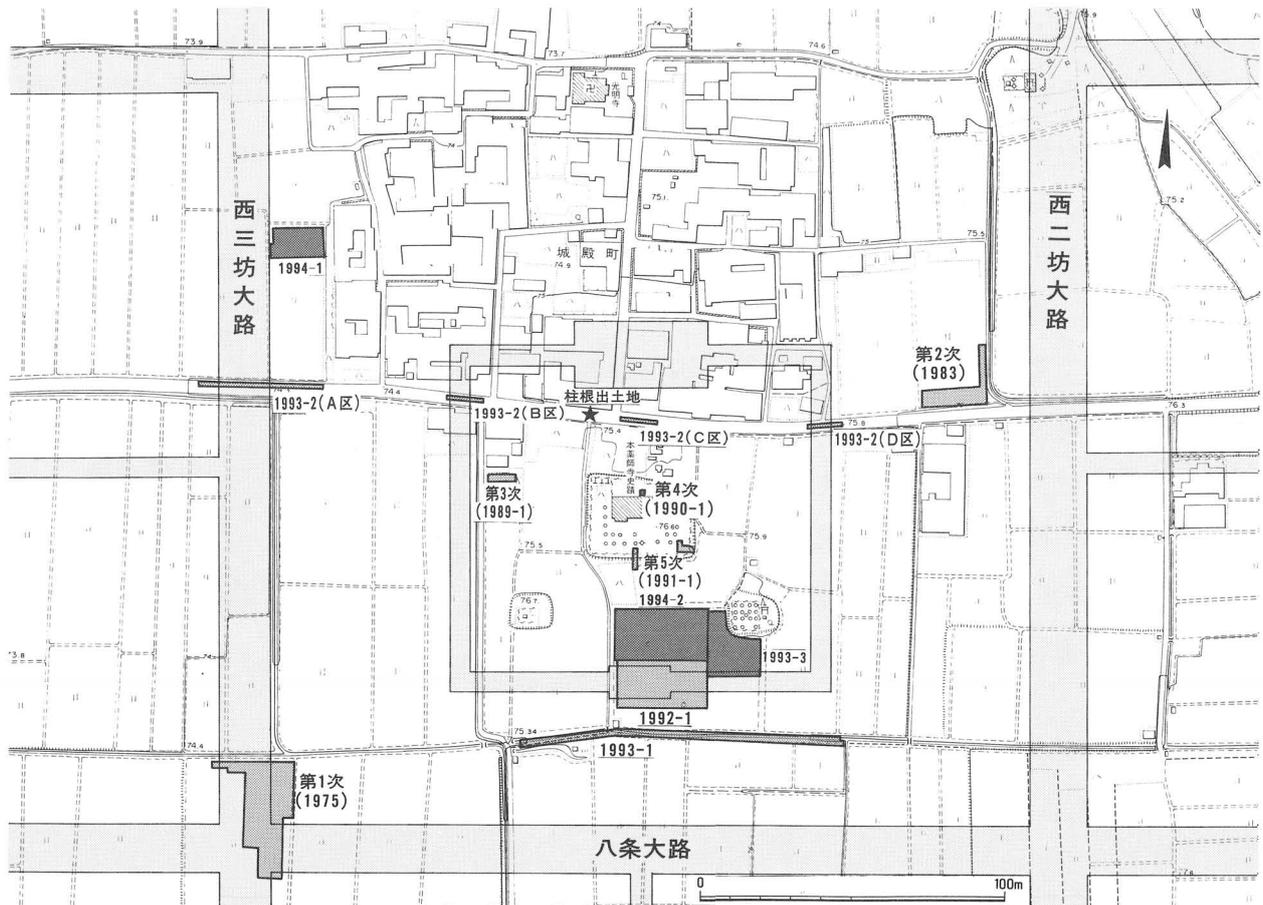


Fig.52 本薬師寺1993-3、1994-1・2次調査位置図(1:2500)

た心礎（東西2.1m、南北1.7m）のほか、四天柱礎石4個と側柱礎石11個がほぼ元の位置を保って残っている。側柱礎石は本来あった12個のうち1個が失われ、残る11個のなかにも大きく欠損した礎石がある。裳階の礎石は全くみあたらないため、この塔に裳階があったかどうか議論された。今回の調査区は東塔跡土壇に及ばなかったため、裳階の有無について判断できる遺構を検出することはできなかったが、東塔の基壇規模および基壇周囲の施設について新たな知見をうることができた。

東塔基壇に関わる遺構 東塔西南隅の基壇地覆石抜き取り穴と階段地覆石抜き取り穴がある。

基壇地覆石抜き取り穴は、幅約70cmの溝状を呈している。地覆石据え付け掘形は確認していない。階段は南面階段と西面階段が調査区内に入っているが、これも石階はおろか地覆石まで完全に抜き取られ、その本来の位置を確定することはできなかった。

これら抜き取り穴および調査区内各所からは凝灰岩の切石断片が多数出土している。さらに、金堂の基壇化粧および階段には凝灰岩切石が使用されたことが既に判明しているため、東塔の基壇化粧も凝灰岩切石を用いたとみてよいだろう。

地覆石の位置を確定することはできなかったが、後述する基壇周囲の化粧との関係から、基壇規模は一応、一辺14.2m、周囲の石敷きからの基壇高は1.45mと推定される。

調査区が基壇本体におよんでいないので基壇築成については十分な調査ができなかったが、調査区の東辺で基盤層が大きく落ち込む部分があった。

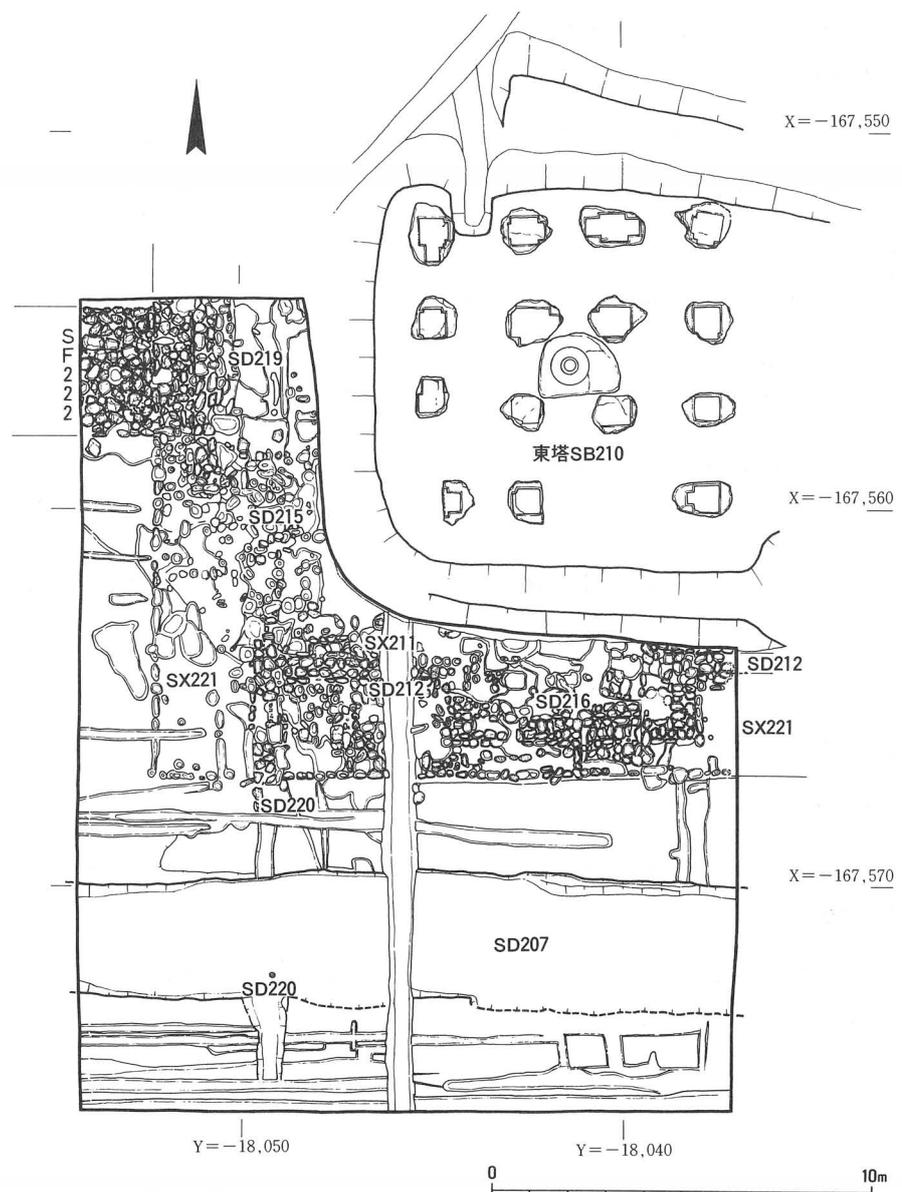


Fig.53 本薬師寺1993-3次調査遺構図(1:200)

これが基壇の掘り込み地業と関連する可能性はある。

東塔基壇周囲の遺構 玉石敷き S X 221は東塔の基壇周囲にある、人頭大ほどの川原石を用いた玉石敷きである。後世の攪乱でかなりの敷石が抜き取られていたが、その構造と規模をほぼ確認した。周囲に玉石列をめぐる正方形の施設で、わずかに依存する玉石列とその抜き取り穴から復元すると、一辺約21.8mの正方形となる。基壇に接するところに幅の狭い縁取り（犬走り）があり、さらに石組雨落溝がめぐる。そして雨落溝と縁石との間には玉石を敷き詰めてある。

犬走り S X 211は、玉石2石分、約60cm幅である。基壇西南隅に、ごく部分的に残るだけだった。

犬走りに沿って玉石組の雨落溝（S D 212・215・216・219）がめぐる。溝底に玉石を二列並べ、両側にやや平たい玉石を立て並べる。幅約60cm、深さ約10cm。階段部分（S D 216・219）は幅5.8m（心々）で、1.65m外側にはりだす。西階段周囲の雨落溝 S D 219は、西側石にほかの部分より大きな石を使用する。後述する参道が接続することと関連するのであろう。南西隅では西面雨落溝 S D 215がそのまま南に延びる。この南北溝 S D 220は、石敷き S X 221の範囲の長さ約2.5m分は石組溝だが、石敷きの外側では素掘り溝である。ただし、石敷きの南に接して西側石が2石あるので、石敷きからはずれた1m弱の部分だけは石組だった可能性があるが、底石はなかったようだ。雨落溝からは瓦のほか、金銅製垂木先金具、銅釘、土師器、須恵器などが出土した。出土土器には9世紀後半のものがある。

参道 S F 222は、東塔の西面階段の正面にある幅3.4mの石敷き参道である。玉石敷き S X 221より大ぶりの玉石を敷き、北と南には玉石列をならべて縁石とする。敷石の隙間には砂利を詰める。東塔と西塔をつなぐ参道と推定され、長さ約2m分を確認した。参道の東端には玉石敷き S X 221西辺の玉石列が南北に通っている。

南面回廊に關係する遺構 南面回廊北雨落溝の底石抜き取り溝 S D 142を確認した。

そのほかの遺構 S D 207は東塔と南面回廊の間にある東西溝である。幅3.5m、深さ0.4m。南北溝 S D 220と重複し、それより新しい。多量の瓦が堆積し、ほかに須恵器、土師器、凝灰岩切石破片などが出土した。東塔廃絶時の瓦を捨て込んだのであろう。

遺物

出土遺物は、瓦類、土器、金属器、凝灰岩切石断片などがある。

瓦類 丸・平瓦、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦、隅切り瓦などがある。

軒瓦（Fig.54）は、軒丸瓦174点、軒平瓦99点、総計273点出土した（Tab.10）。大半は7世紀の創建時のもの。普通サイズのセット（6276A a - 6641H）と小型の裳階用のセット（6276E - 6641K）がある。出土量からみてこの二組が東塔の創建軒瓦であろう。補修に用いられた軒瓦には、奈良時代前半の平城薬師寺創建軒平瓦6641Gを初めとして、奈良時代後半から平安時代

はじめ頃までの軒瓦がある。いずれも平城薬師寺または平城宮と同範である。この状況は中門の調査とかわるところがない。

丸瓦と平瓦は、ごく少量の格子叩きの行基丸瓦と同じ叩き板を使った粘土板桶巻き作りの平瓦を除く大半が、縄叩きの玉縁丸瓦と粘土板桶巻き作りの平瓦である。縄叩きは通常の縄巻き叩き板のほかに、縄を三つ編みにして叩き板に巻き付けた特殊な縄叩きがあり、これが多数を占める。縄叩き目が一条ごとに向きをかえる「ハ」字形の縄叩き目になるのが特徴である。平瓦は凹面に、丸瓦は凸面にていねいなナデ調整を加える。

道具瓦は熨斗瓦と面戸瓦が出土した。ともに切り熨斗瓦と切り面戸瓦である。熨斗瓦は凹面にナデ調整を行わない。

土器 須恵器、土師器、白磁、青磁、転用硯、漆附着土器のほか弥生土器がある。

比較的まとまって土器が出土したのは、東西溝S D 207と東塔周囲の雨落溝である。東西溝S D 207からは土師器、須恵器、弥生土器などが出土した。遺構の年代を示す土器は土師器小皿 (Fig.55; 1~6) である。直径10.0~11.4cm、器高1.7~2.1cm。灯明皿に使用された痕跡を残す。10世紀代。東塔周囲の雨落溝からは、土師器、須恵器などがある。土師器小皿 (Fig.55; 7~11) はいずれも灯明皿と思われる。図

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
6276 A a	104	6641 H	58
A b	2	6641 K	14
A c	2	6647 C b ?	3
6276 E	46	6647 G	1
		6647 I	2
計	154	計	78
薬師寺32	4	6641 G	2
33	1	6663 I	4
33or34	5	6701 A	2
36	10	6721 D	1
計	20	薬師寺239 計	1 10
		型式不明	11
合計	174	合計	99

Tab.10 出土軒瓦集計表

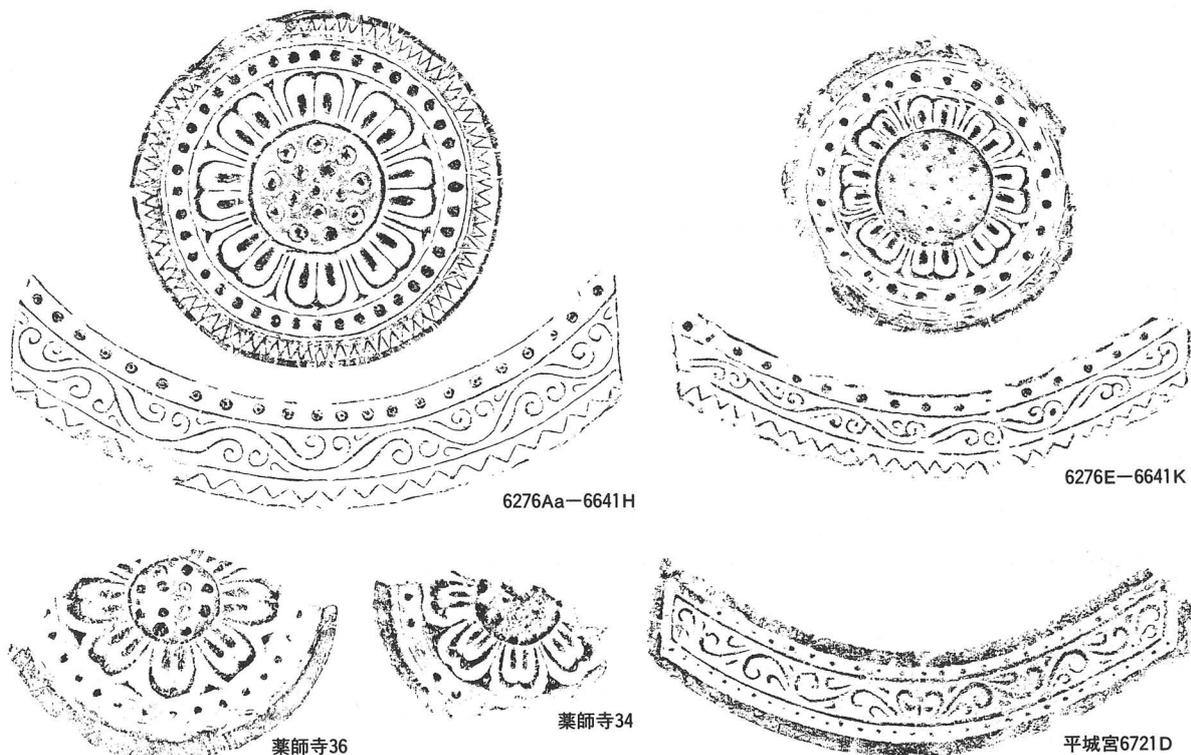


Fig.54 主な出土軒瓦 (1:4)

示したのは、S D 212 (8・11)、S D 215 (7)、S D 216 (9)、S D 219 (10) から出土した土器。S D 207 出土土器よりは若干古く、9世紀後半の年代が与えられる。

金属器ほか 金銅製垂木先金具、金銅製飾金具、銅釘、銅環、鉄釘などがある。金銅製垂木先金具(Fig.56; 1)は長方形の金具で、対葉花紋を透かし彫りし、毛彫りの輪郭線を刻んだもの。一辺12cm×10.5cm(4寸×3.5寸)に復元できる。同形・同紋の垂木先金具が平城薬師寺からも出土している。飾金具(Fig.56; 2)は直径6cm(2寸)の扁平な半球形の本体に四角錐形の脚が2本つくもの。脚は先端を欠損する。釘隠しで

あろうか。ほかに風鐸の吊金具かと思われる銅環や銅釘がある。鉄釘は15本が出土した。最も依存状態の良いものは全長が18.2cmある。

そのほか、土馬の断片、基壇化粧に使用された凝灰岩の切石断片、弥生時代のサヌカイト製石鏃や剥片がある。

まとめ

遺存状況は良くないが、東塔基壇周囲の状況がほぼ明らかになった。東塔の基壇外装には凝灰岩切石が使用された可能性が高く、基壇規模についてもおおむねの推定を行うことができた。基壇周囲の化粧は、玉石敷きの犬走り、玉石組の雨落溝、石敷き、という構造が判明した。

平城薬師寺の東塔の基壇外装と周囲の化粧については発掘調査成果がないが、調査された平城薬師寺西塔と比較すると、基本的な構成は全く一致する。

平城薬師寺では従来知られていなかった施設としては、二つの塔をつなぐ石敷きの参道がある。昨年度の中門の調査によって、中門と金堂を結ぶ推定幅4.5mの石敷き参道の存在が推測

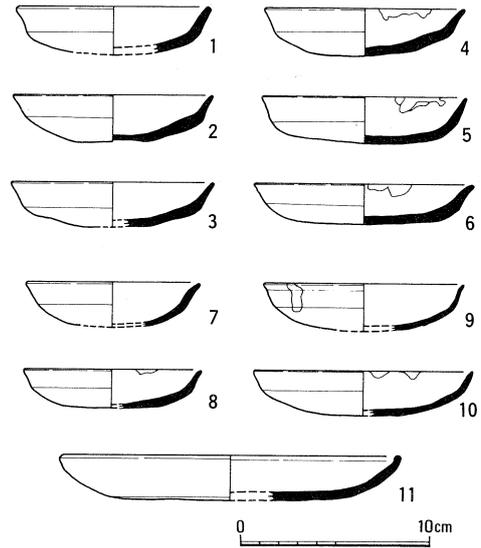


Fig.55 出土土器(1:4) 1~6: S D 207 7~11: S D 212・215・216・219

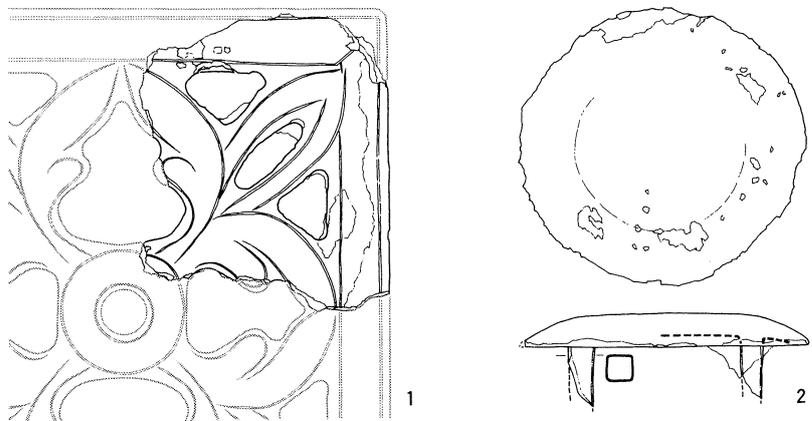


Fig.56 金銅製垂木先金具(1)・飾金具(2)(2:3)

	基壇辺長×高	犬走幅	雨落溝幅	階段部	石敷規模	参道
本薬師寺東塔	14.2 m×1.45m	約60cm	約60cm	5.8m×1.65m	21.8 m四方	幅3.4m
平城薬師寺西塔	13.65m×1.4 m	約60cm	50~60cm	5.0m×1.8 m	20.75m四方	不明

Tab.11 本薬師寺東塔・平城薬師寺西塔基壇規模比較

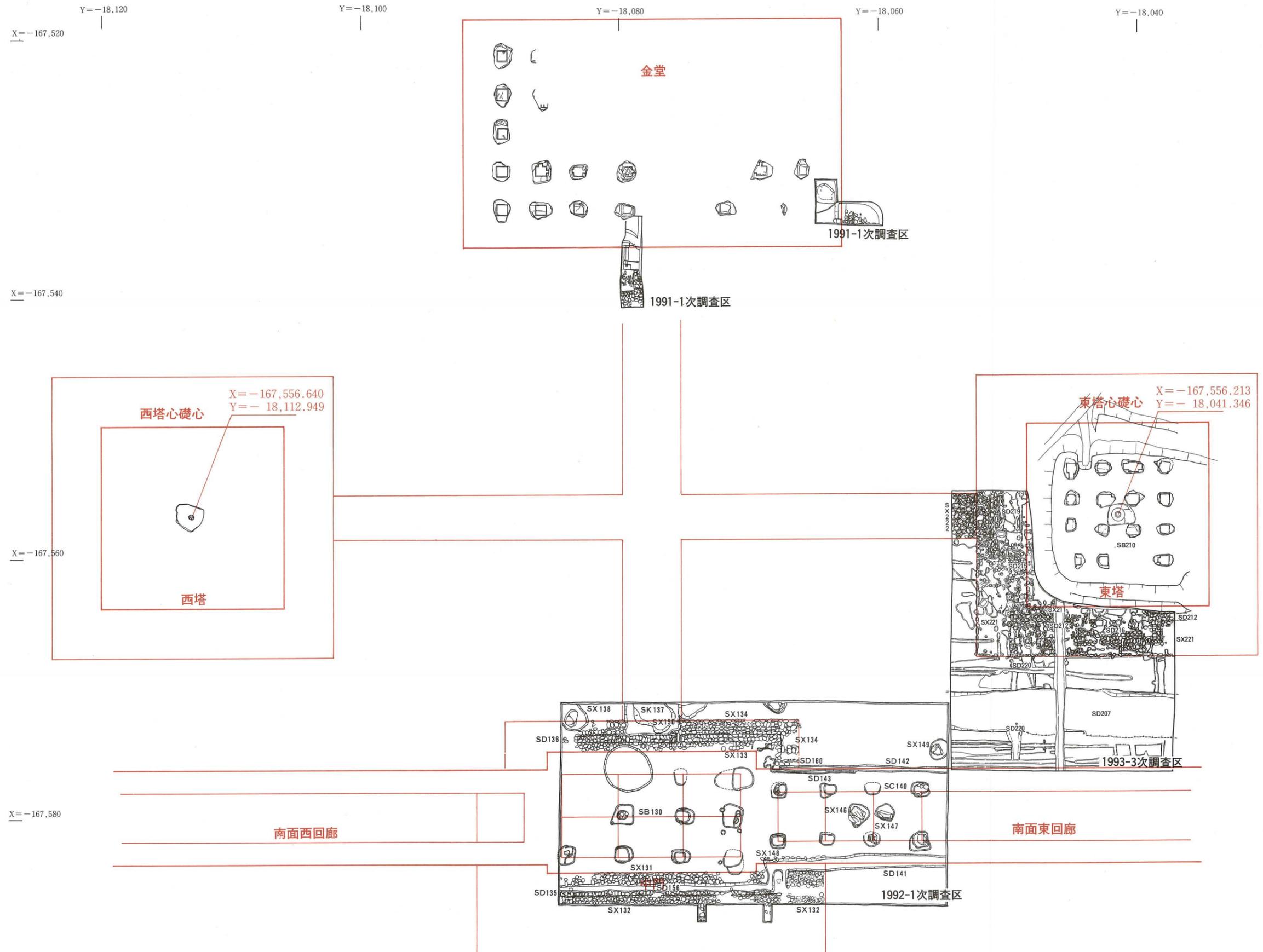


Fig.57 本薬師寺伽藍中枢部遺構図 (1 : 300)

されている。今回、幅3.4mの東西方向の参道を検出したことによって、中門、金堂、東西両塔でかこまれる境内地の中心に石敷きの参道が十字に設置されていた可能性が高くなった。

今回、発掘調査と平行して、金堂、東西両塔の礎石の実測調査を実施した (Fig.57)。東西両塔心礎の心々距離は71.606m、国土方眼に対する振れは $0^{\circ}21'27''$ 北で西偏する。また、心礎上面の標高は、東塔が76.790m、西塔が76.717mで、西塔が約7cm低い。東西両塔心礎心の中点を求めて、先述した方位の振れを伽藍中軸線に考えると、金堂の礎石配置はこれによく整合するが、中門の推定心は若干ずれる。今後の調査で検討すべき課題である。

出土遺物ではまず、本薬師寺創建期の瓦が大量に出土したことが注目される。軒瓦の出土量からみて、東塔の創建軒瓦は6276Aa-6641H、および6276E-6641K、の二組である。前者が本屋根用、後者は裳階用である。従来、東塔の基壇上には裳階の礎石がないことから、裳階の有無が議論されたが、今年度の1993-1次調査で中門南方から、使用された堂塔は不明ながら、裳階の礎石が出土したこと、また金堂周囲からも今回の東塔周囲からも裳階用と推定できる小型瓦が出土したことなどから、本薬師寺の金堂ならびに東塔には裳階が存在した可能性が高くなった。さらに、創建軒瓦以外に、奈良時代から平安時代の瓦も出土し、それらはすべて平城薬師寺あるいは平城宮と同範であった。このような状況は昨年度の中門調査区での軒瓦の出土状況とほぼ軌を一にするものであり、創建の東塔が平城遷都後もこの地に存在し、平城薬師寺の管理下に管理・運営されたことを示すとみてよいだろう。また、東西溝SD207出土土器からみて、東塔の廃絶時期は10世紀代と推定できよう。

また、今回の調査で塑像の断片がまったく発見されなかったことにも注意したい。『薬師寺縁起』によれば平城薬師寺の塔には塑像群があり、本薬師寺の塔にも同様の塑像群を想定する説があった。しかし、今回、塑像の破片はまったく出土しなかったので、本薬師寺の東塔初層には塑像群は安置されていなかった可能性が高くなった。このことは、平城薬師寺の塔と同様に初層に大規模な塑像群を想定して広い空間を必要とするような建築構造を推定する必要のないことにつながる。現存する側柱礎石には基本的に地覆座が作り出してあったと考えられる。地覆座の作り出しをまったくもたない側柱礎石は1個だけであり、それ以外は破損品を含めて少なくとも片方には地覆座を設けている。なかには西北隅の側柱礎石のように地覆の幅に合わせて地覆座を作り直したものまである。したがって、側柱筋には地覆があり、壁が立ち上がっていたと考えたい。このことはまた、裳階が法隆寺塔のように付加的な構造であった可能性を示唆するものともいえよう。

今回の調査は東塔の裾まわりに限られた調査で、基壇部の調査を行っていない関係から階段規模の確定などは徹底的な調査を実施しなかった。しかし、本薬師寺東塔についてのこれまでの研究に再検討を迫るような重要な発見もあった。未解決の部分は多いが、周辺の調査を重ねるなかで調査の問題点や課題も整理されていくことと思う。

B 本薬師寺1994-1次

(1994年9月~10月)

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は本薬師寺の寺地推定地内の西北に位置する。本調査区の南では1975年の1次調査で、西三坊大路と八条大路の交差点と、西三坊大路東側溝の東側に並行して築地の雨落溝と推定される南北溝を検出している。1993年に行った本薬師寺1993-2次調査A区においても、西三坊大路東西側溝を確認している。本調査区の西端が西三坊大路の東側溝推定位置に位置することから、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設の検出が期待された。検出した遺構は建物1棟、藤原宮期直前の東西溝、弥生時代の溝、流路で、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設は確認できなかった。

藤原宮期以前の遺構 基本層序は地表面から耕作土、床土、明黄灰色土で、遺構はすべて明黄灰色土の地山面で検出した。

SD255は調査区東南でわん曲する流路である。幅約2m、深さ約40cmで、遺物は全く伴出せず、自然流路と思われる。

SD252は、発掘区西端の逆く字形の溝である。幅50cm~1m、深さは20cm~25cmである。東南辺の一部の溝幅が狭く、この部分が通路であった可能性がある。溝内からは弥生後期後半の土器が出土している。祭祀に関わる遺物は出土していないが、方形周溝墓の可能性が考えられる。また、斜行する溝SD253・SD254からも弥生後期後半の土器が出土している。

SD251はほぼ国土方眼方位に沿う東西溝である。溝幅は1m~1.2mで、発掘区の中央部で途切れ、溝は西へ流れる。発掘区の西端での溝深さは、約30cmである。溝内からは飛鳥IV~Vの土器が出土しており、藤原宮期直前の遺構もしくは、本薬師寺造営頃の遺構と推定する。

藤原宮期の遺構 SB250は東西1間、南北1間の建物である。柱間寸法は東西3.6m(12尺)、南北3.3m(11尺)と広い。建物内部には丁度建物の中央位置に2.4mの間隔を隔てて2個の柱穴が並ぶ。これら柱穴が他の建物の柱穴の可能性もあるが、SB250の柱間寸法が大きなこと、

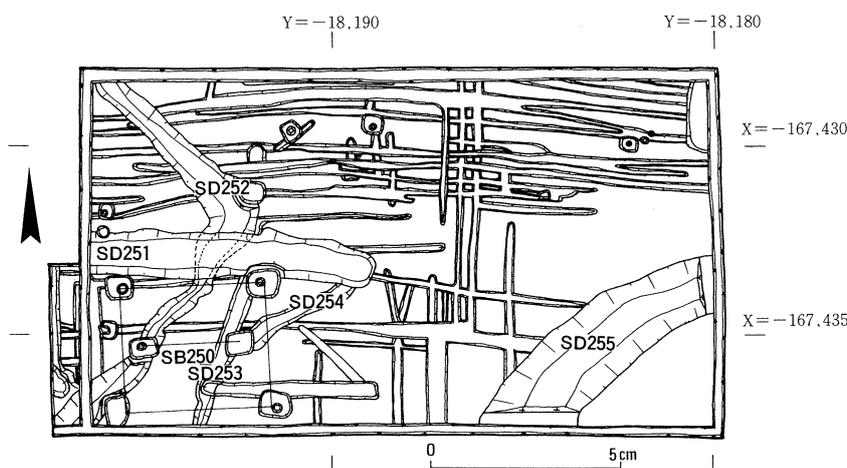


Fig. 58 本薬師寺1994-1次調査遺構図(1:200)

その位置が建物の中央に位置することから、特殊な構造の建物と考えておく。

発掘区西端で溝肩を検出し、ほぼ西三坊大路東側溝の東肩に位置するが、ごく一部の検出でもあり、耕作溝である可能性も捨て切れず、積極的に西三坊大路東側溝と認定するには至らなかった。